

## 7 1. 埼玉県 4 例目（日高市）の事例

### (1) 概要

#### ① 所在地

埼玉県日高市

#### ② 飼養状況

採卵用うずら 約 15 万羽

鶏舎	飼養羽数	日齢
鶏舎 A <発生鶏舎>	52,829 羽	35~189 日齢
鶏舎 B	70,191 羽	161~343 日齢
幼雛舎	9,927 羽	0~10 日齢
中雛舎	16,110 羽	11~34 日齢

(令和 5 年 2 月 1 日現在)

#### ③ 発生確認日

令和 5 年 2 月 1 日

#### ④ 農場見取図



### (2) 現地疫学調査実施年月日

令和 5 年 2 月 1 日

### (3) 農場の周辺環境・農場概況

- ① 当該農場は、平野部に位置し、周辺は田畑、民家が存在する。農場の南西側 3~5m 程の場所を川が流れており、反対側の川岸には竹林が広がっていた。また、南西側以外の農場周囲の多くは空き地であった。
- ② 当該農場は、上部にモニターがある構造の低床式セミウインドウレスの成鶏舎が 2 棟（うち

1 舎が発生舎)、2階建てセミウインドウレスの中小鶏舎1棟からなる。孵卵から食肉処理まで一貫して行う農場であり、衛生管理区域内に加工施設が併設されていた。

- ③ 発生時はニホンウズラ及びフランスウズラが約14.9万羽飼養されていた。各鶏舎には、ニホンウズラを飼養する列とフランスウズラを飼養する列があり、ニホンウズラの列は8段、フランスウズラの列は4段で、発生舎は6列(通報時34~188日齢)が飼養されていた。

#### (4) 通報までの経緯・発生時の状況

- ① 農場によると、通常はニホンウズラ及びフランスウズラの1日当たりの死亡数はそれぞれ10羽程度であったとのこと。1月28日及び29日は成鶏舎1棟のケージ6列のうち一番北側の列において出入口から3分の1辺りの場所の下段で3か月齢のフランスウズラの死亡数がやや増加(各日12羽)し、30日に上段でも死亡数の増加(20羽)を認めた。出入口側1/3辺りから奥方向にかけて死亡数が増えていった印象があり、31日に死亡数が32羽になったことから、高病原性鳥インフルエンザを疑い、家畜保健衛生所に通報したとのこと。
- ② 調査時、発生舎の一番北側の列においてまとまった死亡が確認された。発生舎ではない棟の成鶏舎でも死亡個体が散在していたが、農場によると中鶏舎から移動後間もないことが理由ではないかとのこと。

#### (5) 管理人及び従業員

- ① 当該農場の作業従事者は11名(うち正社員は4名)おり、そのうち10名が鶏舎内作業及び集卵業務、1名が加工業務を担当していた。
- ② 鶏舎ごとの専属従業員は決まっておらず、その日の作業状況に応じて各鶏舎を出入りするとのこと。

#### (6) 農場の飼養衛生管理

- ① 農場入口にはチェーンゲートと立入禁止看板が設置されていた。
- ② 農場によると、従業員は衛生管理区域外の駐車場を利用し、衛生管理区域に入る際は、農場入口の事務所棟ロッカー一室で専用の作業着、手袋、長靴を着用するとのこと。
- ③ 鶏舎を移動する際には、それぞれの鶏舎に設置された手指消毒及び踏込み消毒(逆性石けん、2日に1回交換)を実施するとのこと。各鶏舎専用の長靴交換はされていなかった。
- ④ 農場出入口に自動車両消毒ゲートはなく、本社GPセンター、飼料会社、肥料会社及び加工会社の来場車両は手動の蓄圧式消毒ポンプにより消毒を実施するとのこと。なお、飼料会社は長靴を持参し、農場入場時はそれを使用しているが、更衣と手指消毒は実施していないとのこと。
- ⑤ 発生舎はモニター構造の屋根と、屋根裏のある構造で、モニター部分には網目1.5cm程度のネットが張っており、都度、補修をしているとのこと。
- ⑥ 発生舎は、開放舎を改修してセミウインドウレス化して使用しており、鶏舎出入口側と天井モニター部の入気口から入気し、奥側壁面の排気ファンから排気する構造となっていた。天井モニター部は常時扉を閉めており、また、鶏舎出入口側の入気口は昨年11月頃から閉鎖しており、冬季の入気は人の出入りの際等に行われていたとのこと。鶏舎の天井にはインレット等入気量を調節する設備はなかった。
- ⑦ 農場によると、両成鶏舎ともに順次、廃鶏の出荷と自家育成の鶏の導入を行っているため、オールイン・オールアウトは実施していないとのこと。雛を運ぶコンテナや台車等は、各鶏舎共通で使用していたが、使用ごとの消毒はされていなかった。直近の成鶏舎の導入はフランスウズラ(非発生列)を1月22日。
- ⑧ 農場によると、1日1回集卵ベルトで収集された卵を手作業で採卵し、コンテナに入れた状態でラックに積み、人の手で押して場内の集卵室まで運搬しているとのこと。集卵舎への持ち込み及び成鶏舎への持ち帰りの際に、ラックの洗浄・消毒は行っていないとのこと。食用卵は本社GPセンターに出荷しているほか、一部加工向けの出荷や直売をしていた。

- ⑨ 当該農場では、通常、外部からの種卵や雛の導入は行なっておらず、場内で種卵の生産、孵化、育雛、育成を行っていた。種卵採取用の鶏は成鶏舎の一部のケージで飼養されていた。農場によると、種卵は研究施設や学校に少数出荷することがあるが、他の鶏農場に出荷することはないとのこと。種卵を出荷する際に、卵の洗浄・消毒は実施していないとのこと。
- ⑩ 農場によると、採卵鶏は10～11か月齢で、場内で食肉用及びペットの餌用に加工する等により廃用処理しており、生体での出荷はしていないとのこと。成鶏舎の雄雛（100日齢）は、注文に応じて農場内の処理室で食肉処理後レストラン等に出荷しているほか、ペットフード等の用途で出荷しているが、他の鶏農場に出荷することはないとのこと。
- ⑪ 農場によると、発生舎を含む成鶏舎の糞は毎日除糞ベルトで回収して農場所内のダンプで場内の堆肥舎に運搬し、一時的に堆肥舎に堆積した後に、週3回コンポストに投入し、堆肥化しているとのこと。除糞ベルトからコンベアへの投入口には蓋がされており、作業時のみ蓋を開けるとのこと。
- ⑫ 農場によると、死亡鶏の見回りは、通常1日1回朝に実施し、週2回はライトを使って入念に確認していたとのこと。なお、死亡鶏は毎日コンポスト稼働時に投入するとのこと。
- ⑬ 農場では市水を使用していた。また、飼料タンクには蓋が設置されており、飼料はパイプを通じて鶏舎内に供給されていた。
- ⑭ 農場によると、管理獣医師の来訪は何もなければ年1回程度で、直近1か月の訪問はなかったとのこと。

(7) 野鳥・野生動物対策

- ① 農場によると、農場内では、堆肥舎付近でカラスを見かけるほか、ネコも見ることがあるが、鶏舎内で見かけることはないとのこと。また、近くの農場ではキツネやタヌキがいたという話を聞いたことがあるとのこと。
- ② 農場によると、鶏舎内のネズミ対策として、月2回業者にトラップを仕掛けてもらっており、トラップに1匹捕まるかどうかくらいであるとのこと。日常的にネズミを見かけることはなく、調査時もラットサインは認められなかった。また、各鶏舎の壁等には小動物が侵入できるような穴等は認められなかったが、出入口扉には建付け上隙間が生じていた。
- ③ 調査時には、農場敷地内の堆肥舎屋根にスズメの群れ、農場裏手の樹木下に大量の鳥の糞、農場周辺の対岸の竹林にカラス、ハト、川でサギを確認した。

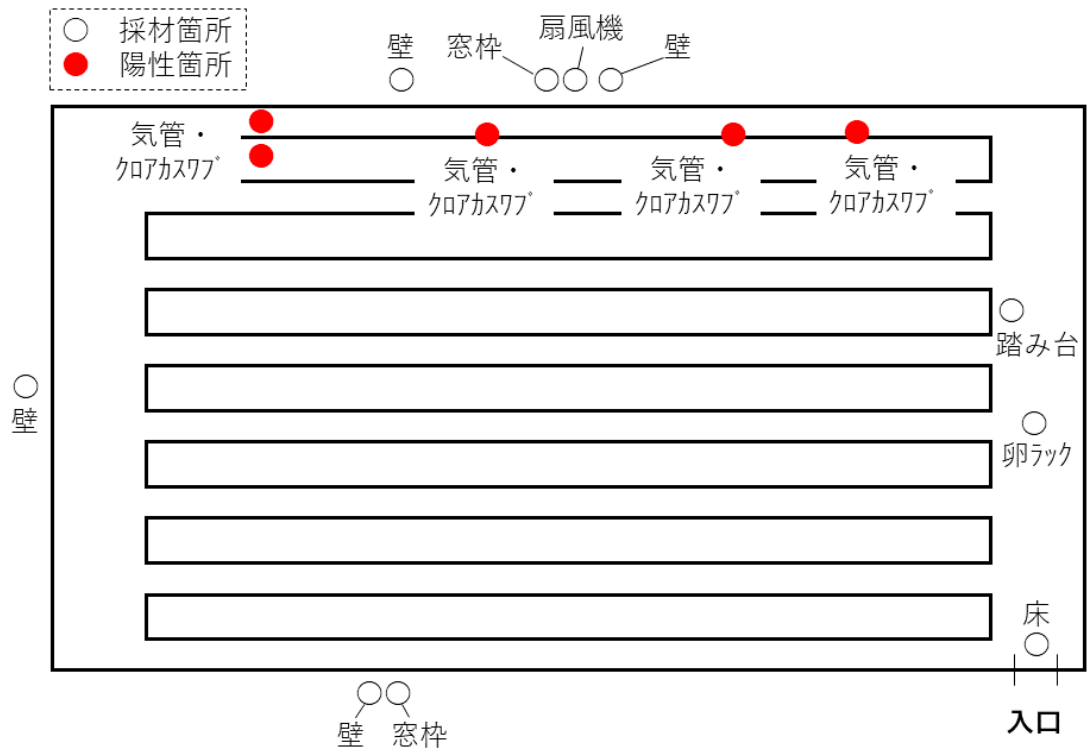
(8) 環境サンプル

環境検査材料リスト（下線部はウイルスが検出された検体）

採材場所	採取したサンプル
発生鶏舎（鶏舎A）	出入口床、踏み台、卵ラック、壁、窓枠、扇風機、 <u>気管・クロアカスワブ（死鳥）</u>

※未発生鶏舎は採材なし。

【発生鶏舎採材場所見取り図】



72. 茨城県4例目（かすみがうら市）の事例

(1) 概要

① 所在地

茨城県かすみがうら市

② 飼養状況

肉養鶏 約6,500羽

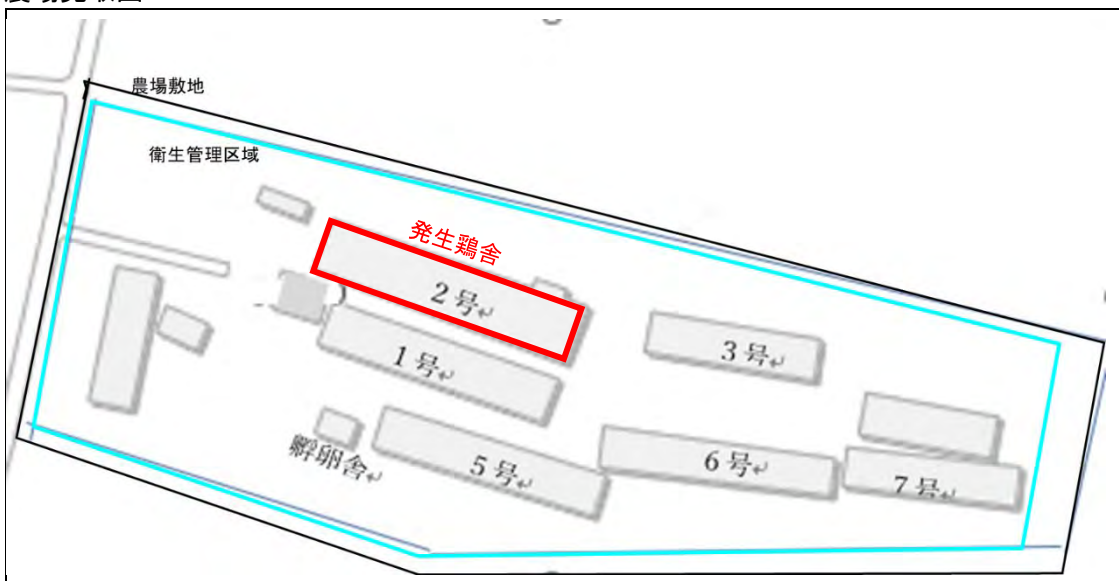
鶏舎	飼養羽数	日齢
1号舎	500羽	1～15週齢以上
2号舎 <発生鶏舎>	1,400羽	30～110週齢
3号舎	1,100羽	1～15週齢以上
5号舎	1,800羽	1～15週齢以上
6号舎	300羽	8～70週齢
7号舎	300羽	55週齢
孵卵場	1,100羽	0～7日齢

(令和5年1月31日現在)

③ 発生確認日

令和5年2月2日

④ 農場見取図



(2) 現地疫学調査実施年月日

令和5年2月2日

(3) 農場の周辺環境・農場概況

- ① 発生農場は平野部に位置し、付近は雑木林に囲まれていた。
- ② 当該農場には、1階建てセミウインドウレス鳥舎6棟と鳩舎2棟（うち空舎1棟）のほか、食鳥処理施設及び孵卵場があった。
- ③ 発生鳥舎では背中合わせの直立3段2列ケージでほろほろ鳥（採卵用の雌雄成鳥）のみが飼養されていた。
- ④ 残りの鳥舎5棟は平飼いで、ほろほろ鳥、鶏及びあひるが飼養されていた。

(4) 通報までの経緯・発生時の状況

- ① 飼養管理者によると、1月31日までの過去21日間の発生鳥舎における平均死亡羽数は約3羽であり、特に異状は認められなかったが、2月1日の昼頃の見回りで50羽以上の家きんの死亡が認められたため、家畜保健衛生所に通報したとのこと。死亡鳥はまんべんなく分布しており、特に入口から入って右手（南側）付近で多く分布していたとのこと。家畜保健衛生所が到着した後、再度計数したところ170羽程度の死亡が確認されたとのこと。飼養する4ロットの日齢全てで異状が見られたが、特に256日齢が多かったとのこと。
- ② 調査時、発生鳥舎では殺処分が終了しており、死亡家きんの状況は確認できなかった。他の鳥舎の一部では、元気消失や顔面の浮腫が認められる鶏が確認された。

(5) 管理者及び従業員

- ① 飼養管理者によると、当該農場の作業従事者は4名で、うち3名が飼養管理を行っており、それぞれの鳥舎で担当が決まっているが、休み等により担当以外の作業を実施することもあるとのこと。
- ② 発生鳥舎では、日常の飼養管理と集卵を担当する従業員1名のほか、人工授精又は除糞作業を担当する従業員2名が定期的に入出入りしているとのこと。

(6) 農場の飼養衛生管理

- ① 農場の衛生管理区域入口には立入禁止を示す看板が設置されていたが、衛生管理区域周囲は一部を除きフェンス等で区切られていなかった。入口の門は使用時以外施錠しているとのこと。
- ② 衛生管理区域に入る際は、従業員は衛生管理区域外側で蓄圧式噴霧器により車両消毒した後、踏み込み消毒槽にて靴底消毒をしてから車両を衛生管理区域内に止め、事務所で農場専用の作業着への更衣又は上着の着用、並びに長靴への履替えを行っており、手指消毒は行っていないとのこと。
- ③ 鳥舎に入る際には、発生鳥舎では前室で手指消毒を行い、踏み込み消毒槽（オルソ剤、2～3日に1回又は汚れた場合はその都度）で長靴を消毒後、鳥舎内に立ち入り、長靴の交換は行っていないとのこと。また、発生鳥舎以外では鳥舎ごとの専用長靴に履き替えているとのこと。消毒槽はオルソ剤で週に2回交換しているとのこと。給餌の際は軍手を着用するが、集卵や人工授精は素手で行っているとのこと。
- ④ 飼料運搬業者等の外来者については、車両で衛生管理区域に入る際の手順は従業員と同様とのこと。飼料運搬業者は農場専用靴を着用するが、専用作業着の着用及び手指消毒は実施していないとのこと。なお、外来者が鳥舎内に立ち入ることはないとのこと。
- ⑤ 飼養管理者によると、1日の見回りは朝晩か昼晩の2回で、1回目の見回りで給餌、2回目の見回りで集卵を行うとのこと。
- ⑥ 発生鳥舎では、食用の無精卵と初生ひな用の有精卵を生産しており、週1回人工授精を行っていたとのこと。直近では1月31日に南側列と北側列の中央通路に面した1レーンで入口側から途中まで行ったとのこと。
- ⑦ 発生鳥舎の糞は、週に1回、人の出入口と反対側の扉から搬出していたとのこと。昨年9月の台風で堆肥舎が破損して使用できなくなって以降は、搬出した糞を農場敷地奥の空き地に野積みしているとのこと。
- ⑧ 健康観察時に回収した死亡鳥は、糞と同じ場所や農場内に掘った溝（発生鳥舎の真隣）に埋却又は野積みしているとのこと。
- ⑨ 発生鳥舎には、換気扇はあるが、鳥舎の温度を保つため最近では回しておらず、能動的な換気は実施していなかったとのこと。換気扇には金網とそれを塞ぐパネルが設置されていたが、パネルがずれたり浮いたりしており、ネズミ等の小型野生動物が侵入可能な隙間ができていた。

- ⑩ 発生鳥舎の飼料タンクは鳥舎横に設置されているが、自動給餌機が破損しており手給餌を行っているとのこと。タンク上部には蓋が設置されていた。
- ⑪ 飲水は井戸水を汲み上げ、消毒せず使用しているが、年2回水質検査を実施しているとのこと。
- ⑫ オールイン・オールアウトは実施しておらず、発生鳥舎では4ロット飼養されていたとのこと。
- ⑬ 鳥舎外壁は、発生鳥舎は月に1回程度、それ以外の鳥舎は区画ごとのアウト時に噴霧消毒しているとのこと。
- ⑭ いずれの鳥舎においても小型の野生動物が侵入できるような隙間が天井、壁等に多数認められた。

(7) 野鳥・野生動物対策

- ① 飼養管理者によると、最近では鳥舎内でネズミを見ないが、殺鼠剤の散布や鳥舎外に粘着シートを設置等の対策をしているとのこと。調査時、鳥舎内屋根裏でネズミが認められた。
- ② 調査時、農場周辺の雑木林ではカラスやスズメなどが認められた。
- ③ 飼養管理者によると、農場敷地内ではネコのほか、カラス、スズメ、野犬を見ることがあるとのこと。調査時、農場内でネコの行き来が見られ、餌やりをしている形跡も認められた。
- ④ 調査時、敷地奥に野積みされた死亡鳥に野生動物に食べられたと思われる跡が認められた。

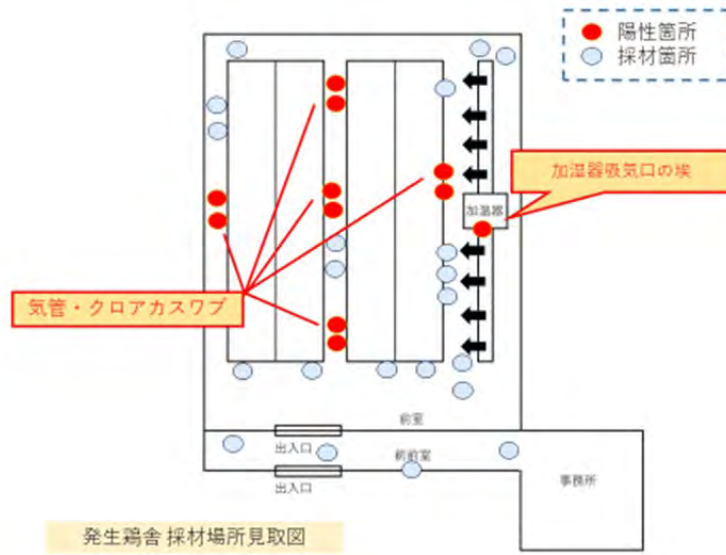
(8) 環境サンプル

環境検査材料リスト（下線部はウイルスが検出された検体）

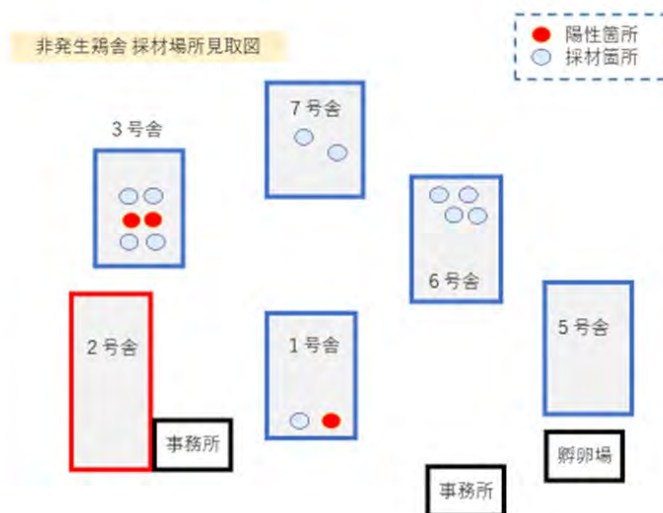
採材場所	採取したサンプル
発生鶏舎（2号舎）	作業台、床、壁、カーテン、 <u>加湿器吸気口</u> 、加湿器排気口、 <u>気管・クロアカスワブ（死鳥）</u> 、卵カゴ、除糞ベルト、柱、ケージ、餌入れ、給水器、カート、羽毛、軟卵、埃、餌
未発生鶏舎（1号舎）	<u>気管・クロアカスワブ（死鳥）</u>
未発生鶏舎（3号舎）	<u>気管・クロアカスワブ（死鳥）</u>
未発生鶏舎（6号舎）	気管・クロアカスワブ（生鳥・死鳥）
未発生鶏舎（7号舎）	気管・クロアカスワブ（生鳥）

※3、6、7号鶏舎のアヒル・ホロホロ鳥・鶏についてはAI抗体検査実施（ゲル内沈降反応）、全て陰性（18羽）

【発生鶏舎採材場所見取り図】



【発生鶏舎以外の採材場所】





73. 茨城県 73 例目（八千代町）の事例

(1) 概要

① 所在地

茨城県結城郡八千代町

② 飼養状況

採卵鶏 約 112 万羽

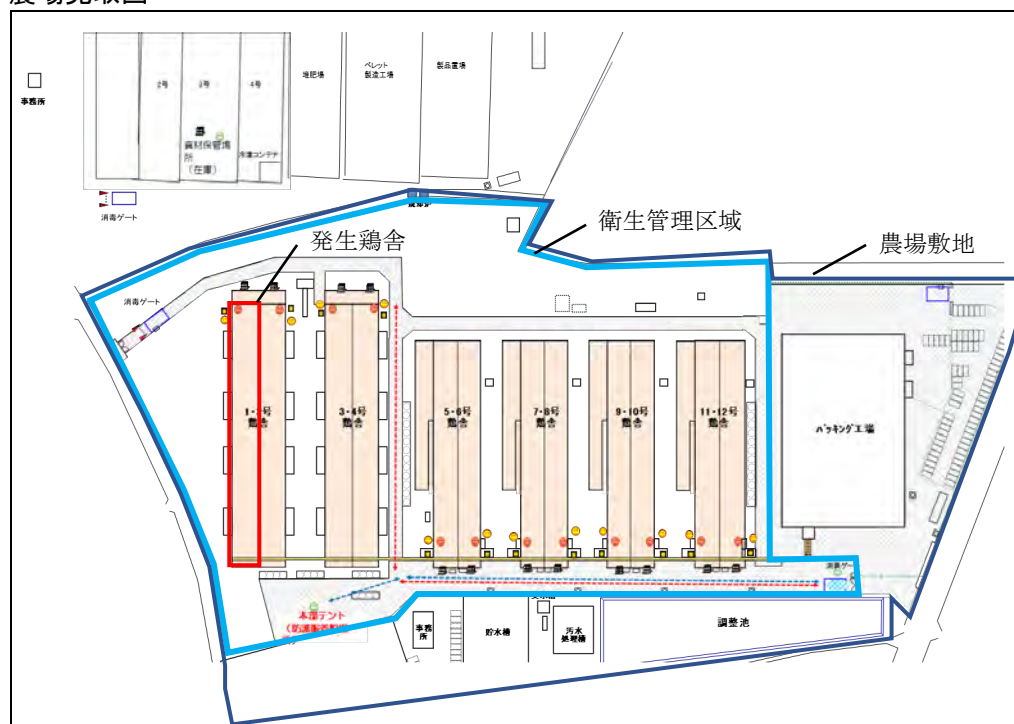
鶏舎	飼養羽数	日齢
1号舎 <発生鶏舎>	82,160羽	521日齢
2号舎	89,275羽	190日齢
3号舎	85,260羽	621日齢
4号舎	91,592羽	306日齢
5号舎	97,902羽	261日齢
6号舎	98,213羽	292日齢
7号舎	96,382羽	359日齢
8号舎	95,304羽	404日齢
9号舎	93,417羽	489日齢
10号舎	92,696羽	544日齢
11号舎	90,728羽	591日齢
12号舎	100,553羽	149日齢

(令和5年2月3日現在)

③ 発生確認日

令和5年2月3日

④ 農場見取図



(2) 現地疫学調査実施年月日

令和5年2月3日 (農水省側で記入)

(3) 農場の周辺環境・農場概況

- ① 当該農場は、周囲に住宅や工場が点在する平地であった。
- ② 当該農場には6棟のウインドウレス鶏舎があり、各棟は内部が壁で区分され、1棟当たり2鶏舎となっていた。発生鶏舎は、農場入口から最も奥(南側)の棟に位置していた。発生時には、全ての鶏舎で採卵鶏が飼養されていた。
- ③ 鶏舎は、6棟中発生鶏舎を含む2棟が2階建ての各階背中合わせ直立3段ケージ5列(10レーン)、4棟が3階建ての各階背中合わせ直立3段ケージ4列(8レーン)を有する。2階及び3階の床はグレーチング構造であった。
- ④ 敷地内には鶏舎のほかに衛生管理区域外にGPセンター、鶏糞処理施設、事務所が併設されていた。

(4) 通報までの経緯・発生時の状況

- ① 農場によると、発生鶏舎(通報時520日齢)では1月12日~30日の平均死亡羽数は10.7羽/日であったところ、1月31日の死亡は27羽と少し多かったが、散在していたため通報しなかったとのこと。翌2月1日は鶏舎全体に偏りなく41羽死亡し、鶏舎内が暑く感じたので換気不良を疑ったとのこと。
- ② 2月2日、発生鶏舎の1、2階中央から奥で、100羽以上のまとまった死亡があり、確認と並行して家畜保健衛生所に通報したとのこと。最終的な死亡羽数は1,000羽を超えていたとのこと。調査当日も、同じエリアで多数の死亡鶏を確認した。発生鶏舎以外の鶏舎では飼養鶏に特段の異状は認められなかった。
- ③ 発生鶏舎の個体は、強制換羽後であったため、餌食いもよく産卵率も落ちていなかったとのこと。

(5) 管理人及び従業員

- ① 従業員のうち42名が農場内で作業しており、うち12名がそれぞれ専属で各鶏舎の管理を担当しているとのこと。夜の見回り時には担当以外の複数鶏舎を回ることがあるとのこと。
- ② 12名中8名は外国籍であるため、各鶏舎の前室には英語、ベトナム語、タイ語が併記された靴や衣服の交換等の入退場手順を掲示していた。なお、最近海外から入国した者はいないとのこと。

(6) 農場の飼養衛生管理

- ① 農場敷地及び衛生管理区域敷地の境界にはフェンスが設置されており、衛生管理区域は明確になっていた。農場全体に消石灰が撒かれており、散布頻度は1週間に1回ほどとのこと。
- ② 従業員は、衛生管理区域外の駐車場に車を止め、区域外の更衣室で衛生管理区域専用の作業着、長靴、帽子を着用し、区域内に入るとのこと。鶏舎に入る際は前室で鶏舎専用の衣服、長靴、帽子、手袋の着用と手指消毒を実施するとのこと。全ての鶏舎入口に踏みみ消毒槽(種類、交換頻度)及び衣類消毒用の電動噴霧器が設置されていた。
- ③ 農場に入場する外来業者は、車両消毒ゲートで車両消毒及びフロアマットを使用するとともに、農場入口に設置されている簡易小屋で専用靴への履き替え、防護服の着用、手指消毒を実施しているとのこと。鶏舎に入る外来業者については、従業員と同様に、鶏舎に入る際に前室で鶏舎専用の衣服、長靴、帽子、手袋の着用と手指消毒を実施するとのこと。
- ④ 発生鶏舎内の換気は、鶏舎屋根上部のインレットから吸気し、鶏舎奥面の換気扇及び鶏舎側面から排気していた。鶏舎側面の排気口の周囲は臭気対策のため囲いがあった。農場に

よると、屋根裏部分は、昨年 11 月に全て点検し、網の破れや鳥の侵入の形跡等がないことを確認したとのこと。

- ⑤ 飼養鶏への給与水は井戸水を塩素消毒後ろ過して使用している。年 2 回水質検査を受けているとのこと。
- ⑥ 飼料は鶏舎横の飼料タンクからインラインで給餌されている。直近 2 週間の出入り記録から、飼料の運搬は 1～2 日に 1 回ほど行われていた。
- ⑦ 各鶏舎は集卵バーコンベアで連結されており、衛生管理区域外に併設された専用 GP センターへ集卵される。
- ⑧ 鶏糞は、発生鶏舎を含む 4 鶏舎では毎日ケージ上部に設置されたベルトに運ばれ乾燥させる。上記以外の 8 鶏舎では、ケージ横のベルトにて鶏舎側面部の乾燥設備に集積される。いずれも完全に乾燥させた後、ベルトコンベアで堆肥舎へ運ばれる。堆肥は袋詰めし、堆肥舎に近い消毒ゲートから衛生管理区域外の製品保管場所に移し、近隣農家が持ち出しでできるようにしている。また、堆肥の一部はペレットに加工して輸出しているとのこと。
- ⑨ 死亡鶏は鶏舎ごとに毎日集め、運搬用のコンテナ（蓋なし）で回収後、冷凍コンテナにて保管していた。レンタル業者は回収時冷凍コンテナから運搬用コンテナを出し、衛生管理区域外に駐車したトラックへ移し替えるとのこと。
- ⑩ 発生鶏舎を含む全鶏舎は、鶏舎ごとにオールイン・オールアウトを行っており、オールアウトの都度鶏舎内の清掃・消毒を行い 14 日間の空舎期間を設けているとのこと。直近の搬入は 1 月 8 日。

#### (7) 野鳥・野生動物対策

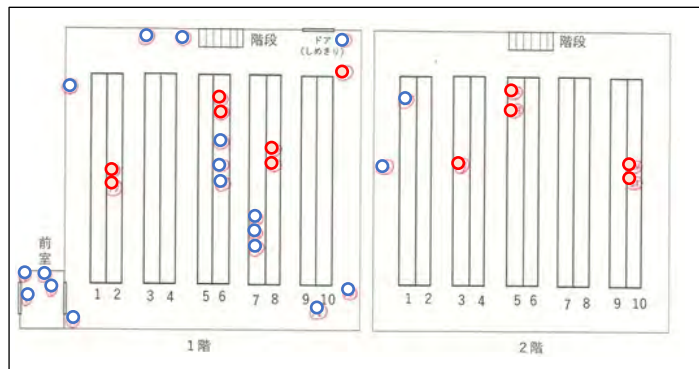
- ① 農場によると、野鳥やネズミは見るとのこと。ネコはたまに見るが、それ以外の野生動物は見ないとのこと。
- ② ネズミ対策として、定期的に殺鼠剤及び粘着シートの設置を実施しているとのこと。調査時、発生鶏舎ではネズミの死体や天井に小さな穴が見られた。非発生鶏舎内でネズミが走る様子及びネズミの死体が認められた。
- ③ 集卵バーコンベアの鶏舎外走行部は上部・側面のカバーと下部のネットで覆われているが、一部破れがあり覆われていない部分を確認された。鶏舎開口部のシャッターの設置はないが、鶏舎の集卵バーコンベア出入口には、ネズミ除けの忌避超音波装置が鶏舎内側に設置されていた。
- ④ 鶏舎から堆肥舎まで鶏糞を運搬するベルトコンベアの経路には全てカバーがされていた。鶏舎開口部のシャッターの設置はない。
- ⑤ 鶏舎内の排水溝は木の板をはめて隙間を塞いでいた。
- ⑥ 農場によると、農場横に町が管理する調整池があり、水が溜まっていることは少ないとのことだが、普段から水鳥が来ていないか確認しているとのこと。なお、今シーズン、水鳥は見えないとのこと。
- ⑦ 発生鶏舎側の境界にはフェンスとともにカラスウリ等の木が並んでおり、結実した実に野生動物の食痕が確認された。
- ⑧ 農場内ではハクセキレイ、カラスが確認され、鶏舎の屋根にスズメ、ハトが複数羽留まっていた。また、事務所近くの木にカラスが複数羽留まっていた。

(8) 環境サンプル

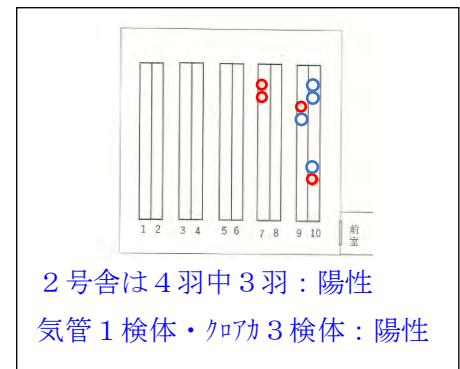
環境検査材料リスト (下線部はウイルスが検出された検体)

採材場所	採取したサンプル
発生鶏舎 (1号舎)	前室床、前室壁、前室長靴の底、前室作業台、 鶏舎内入口近くの壁、鶏舎内バーコン出入口付近、壁、 2階吸気口付近の壁、 <u>2階鶏糞ベルト (ネズミがよく通る)</u> 、 1階左奥ドア付近の壁、1階換気扇、1階右奥ドア付近の壁、 <u>1階鶏糞ピット</u> 、1階エサ樋、1階 飲用水、1階ケージ、 1階餌樋、1階ケージ、1階 飲用水、2階1列後方餌、 1階奥の換気扇付近の羽毛、埃、 <u>気管・クロアカスワブ (死亡鶏)</u>
未発生舎 (2号舎)	<u>気管・クロアカスワブ (死亡鶏)</u>

【発生鶏舎採材場所見取り図】



【発生鶏舎以外の採材場所】



2号舎は4羽中3羽：陽性  
気管1検体・クロカ3検体：陽性

○ : 採材場所、 ○ : 陽性場所

#### 7 4. 鹿児島県 13 例目（鹿屋市）の事例

##### (1) 概要

###### ① 所在地

鹿児島県鹿屋市

###### ② 飼養状況

肉用種鶏 約 2.6 万羽

鶏舎	飼養羽数	日齢
ウインドウレス鶏舎①	4,915 羽	89 日齢
ウインドウレス鶏舎②	6,737 羽	89 日齢
ウインドウレス鶏舎③	6,717 羽	89 日齢
ウインドウレス鶏舎④ <発生鶏舎>	4,921 羽	89 日齢
ウインドウレス鶏舎⑤	3,043 羽	89 日齢

(令和 5 年 2 月 2 日現在)

###### ③ 発生確認日

令和 5 年 2 月 3 日

###### ④ 農場見取図



##### (2) 現地疫学調査実施年月日

令和 5 年 2 月 3 日

##### (3) 農場の周辺環境・農場概況

- ① 発生農場は平野部に位置し、周囲は畑や雑木林に囲まれていた。また、農場南側には幅 3m 程度の水路があった。
- ② 調査時、当該農場から東に約 1.4km に流れる河川ではコガモ 24 羽を確認した。また、北西に約 1.2km 離れた同河川では、カルガモ 4 羽を確認した。

- ③ 当該農場は、平飼いのウインドウレス鶏舎5棟からなる育雛（肉用種鶏）農場であり、発生時は全鶏舎で飼養されていた。発生鶏舎は北から2番目に位置し、鶏舎内は扉付きの網目状の間仕切りにより5区画に分かれており、各区画の飼養管理は一体的に行われている。
- (4) 通報までの経緯・発生時の状況
- ① 農場主によると、通常1日当たりの鶏舎ごとの死亡羽数は1羽程度であったが、発生鶏舎（通報時89日齢）において1月28日に5羽、29日に27羽、30日に35羽死亡した。30日には従業員から農場主に報告があったが、死亡が多く確認されたのが発生鶏舎の1区画のみであり、経過観察としたとのこと。31日にも125羽死亡し経過観察としていたが、2月1日には更に113羽死亡したことから、系列会社の管理獣医師が現場を確認し、死亡鶏の解剖を行い、コクシジウム症又は腸炎を疑い、投薬を開始したとのこと。翌2日に更に368羽が死亡し、40～50羽のまとまった死亡を確認したことから家畜保健衛生所に通報したとのこと。
- ② 最初に死亡羽数が増加し、最も多く死亡したのは鶏舎入口側から2番目の区画であったとのこと。
- ③ 調査時、発生鶏舎では入口側から一番奥の区画以外で多くの死亡が確認されたが、その他の鶏舎においては臨床的な異常は確認されなかった。
- (5) 管理人及び従業員
- ① 当該農場では、従業員4名が飼養管理を行っているが、鶏舎ごとの担当はなく、全員で全鶏舎の管理を行っていたとのこと。
- ② 出荷時やワクチン接種時は、飼養管理を行う従業員ではなく、系列会社の別の従業員が対応していたとのこと。
- (6) 農場の飼養衛生管理
- ① 当該農場の衛生管理区域出入口の門は通常閉め切れ、立入禁止看板が設置されていた。また、衛生管理区域境界は、公道側は有刺鉄線及び反対側は雑木林により囲まれていた。
- ② 農場主によると、農場敷地内には週に1回、系列会社のバイオマス工場で生成された粒状の副産物（散布直後は水分を含むことでpH13程度になることを家畜保健衛生所が確認）を散布していたとのこと。
- ③ 農場主によると、従業員の車両は衛生管理区域外に駐車しており、また農場車両及び外部車両が衛生管理区域に入出入りする際は、衛生管理区域出入口に設置した動力噴霧器により車両消毒を実施していたとのこと。
- ④ 農場主によると、従業員（系列会社の従業員を含む。）は衛生管理区域に入る際、踏込み消毒後事務所隣の更衣室でシャワーを浴び、衛生管理区域専用の作業着及び長靴を着用、使い捨て手袋を着用又は素手を消毒して衛生管理区域に入っていた。
- ⑤ 衛生管理区域に入出入りする外部業者は飼料運搬業者、トイレのくみ取り業者、重油の給油業者に限られ、農場の車両ゲート右横に設置されたボックスの衛生管理区域専用長靴に履き替え、手指消毒をして入場していたが、衛生管理区域専用作業着の着用はなかったとのこと。
- ⑥ 1つの鶏舎は壁と扉で前室と飼養区域に分かれており、農場主によると、従業員が前室に入る際は、前室入口にある消石灰の入った踏込み槽にて長靴を脱いだ後、すのこを挟み、前室用のサンダルに履き替えていた。更に手指消毒を実施し、飼養区域に入る際に設置された容器内でサンダルを脱ぎ、鶏舎内専用の長靴に交換していたとのこと。
- ⑦ 農場主によると、1月24～27日に全鶏舎においてワクチン接種が行われ、発生鶏舎には1月26～27日に入室していた。ワクチン接種は系列会社の専属従業員6～10名が行っており、立会いは行っていないため、実施状況は不明だが、ルール上は飼養管理を行う従業員

と同様の手順で衛生管理区域及び鶏舎に入ることになっていたとのこと。

- ⑧ 発生鶏舎では鶏舎平面の北側に入気口、南側に排気口がある。排気口には換気扇がセットになっており、換気扇の稼働数は当日の気温や湿度に応じて朝の給餌時に変更している。
- ⑨ 農場主によると、導入は初生ひなのみで、126日齢程度で系列の成鶏飼養農場に出荷していた。5鶏舎全て同じ日齢の鶏を飼養しており、農場全体でオールイン・オールアウトを行っている。オールアウト後、清掃・消毒を行い、空舎期間を21日間設けるとのこと。
- ⑩ 農場主によると、敷料としてのこくずを利用していたが、初生ひな導入時以外に追加することはなく、鶏糞はオールアウト時以外に搬出することはないとのこと。
- ⑪ 飼料タンク上部には蓋が設置されており、鶏舎内にラインを通して搬入された飼料は一時的に大型のバケツに蓄積され、朝の給餌時間に従業員が手作業で1日分の必要量を計測して紙袋に小分けして保管し、鶏舎内のラインを通じて自動で給餌する構造となっていた。
- ⑫ 農場主によると、飼養鶏への給与水は上水道を使用しており、消毒等は実施していないとのこと。
- ⑬ 農場主によると、死亡鶏は飼養管理時などに従業員が毎日回収し、衛生管理区域入口外に設置された保管箱に投入しており、それを死亡鶏回収業者が日曜を除いて毎日回収し、系列農場と共同の場外の堆肥処理施設で処理するとのこと。直近では業者による回収は30日、自農場車両による搬出は31日とのこと。

(7) 野鳥・野生動物対策

- ① 農場主によると、農場周辺でスズメやハクセキレイが確認され、時折鶏舎間の空き地でノウサギのものと思われる糞を見かけるとのこと。鶏舎内でネズミやその痕跡を確認したことはなく、前室に殺鼠剤とひまわりの種の混合餌と粘着シートを数か所設置していたが、混合餌を食べられたことはないとのこと。
- ② 調査時に、防疫措置のために発生鶏舎周囲に設置した粘着シートに捕獲されたハツカネズミのほか、タヌキのものと思われる足跡を確認した。
- ③ 発生鶏舎側面の吸気口及び逆側側面の排気用換気扇には網目2.5cm程度の亀甲金網が設置されていた。さらに吸気側の鶏舎側面全体は防鳥ネット(網目1cm×1cm)で覆われており、ネット下部は風で持ち上がらないよう重しが載せてあった。また、鶏舎はこまめに補修されており、調査時に小動物が侵入するような隙間は確認されなかった。

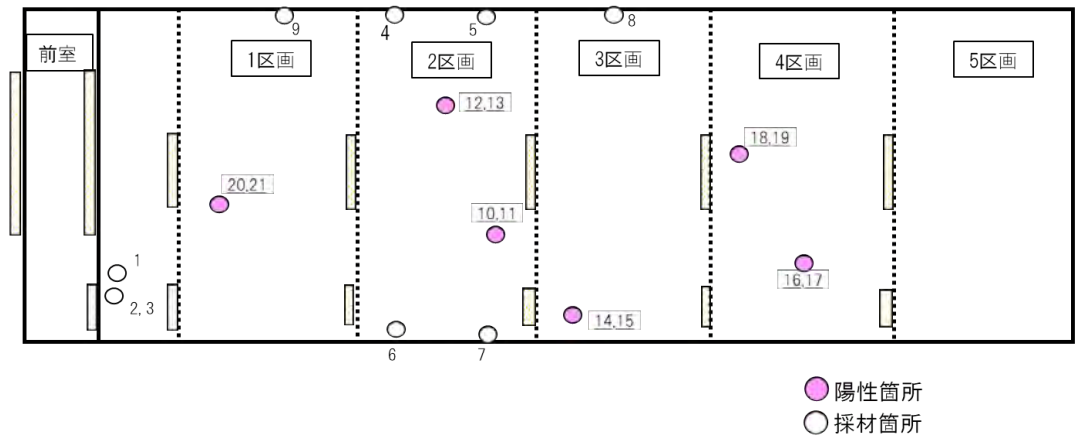
(8) 環境サンプル

環境検査材料リスト(下線部はウイルスが検出された検体)

採材場所	採取したサンプル
発生鶏舎 (ウインドウレス鶏舎④)	床①、長靴底②③、入気口④⑤、排気口⑥、壁⑦⑧⑨、 死亡鶏(気管スワブ⑩⑫⑭⑯⑰⑱⑲⑳)、 クロアカスワブ⑪⑬⑮⑳㉑㉒)、ハツカネズミ⑳
非発生鶏舎 (ウインドウレス鶏舎③)	死亡鶏(気管スワブ㉓、クロアカスワブ㉔)
農場周辺	側溝の水㉕

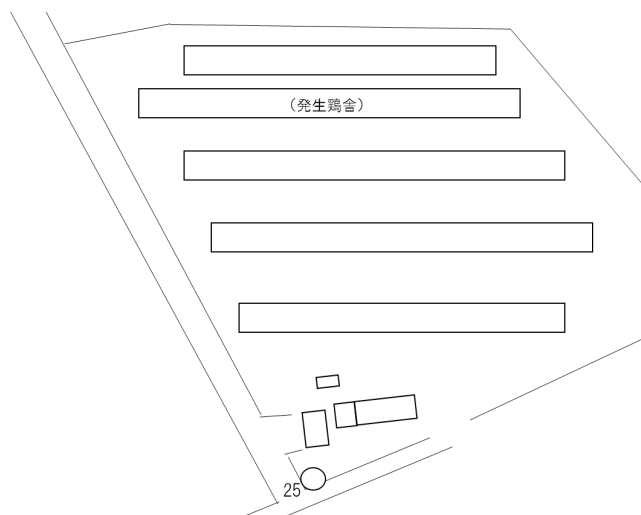
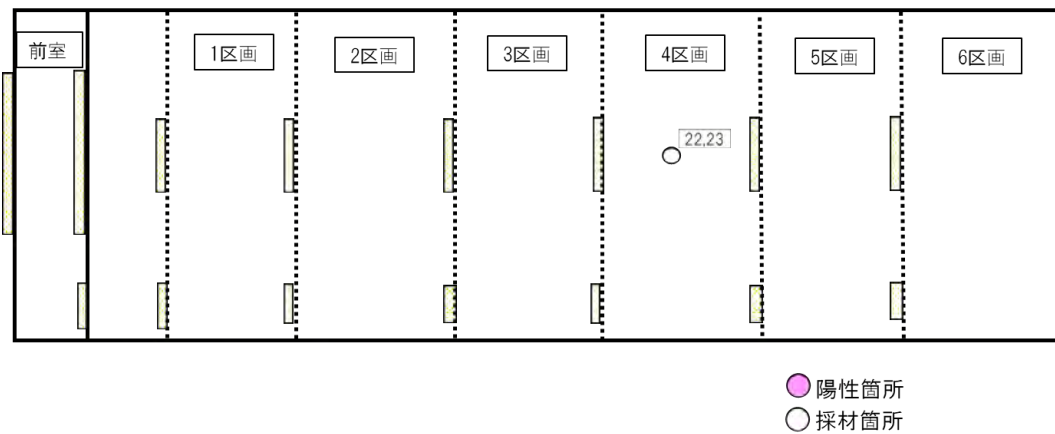
【発生鶏舎採材場見取り図】

(発生鶏舎)



【発生鶏舎以外の採材場所】

(3号鶏舎)





75. 千葉県6例目（横芝光町）の事例

(1) 概要

① 所在地

千葉県横芝光町

② 飼養状況

あひる 約5千羽

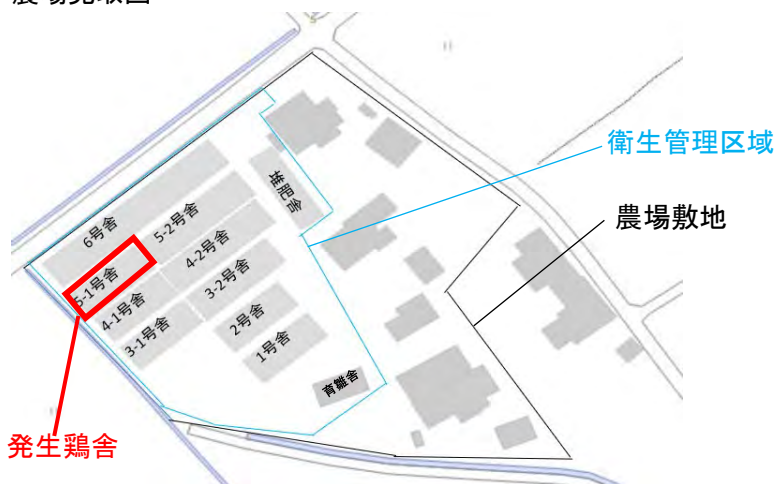
鶏舎	飼養羽数	日齢
1号舎	335羽	436日齢
2号舎（育成舎）	437羽	99日齢
3号舎	1,044羽	333日齢
4号舎	428羽	113日齢
5-1号舎 <発生鶏舎>	327羽	451日齢
5-2号舎	708羽	183日齢
6号舎	1,483羽	211日齢・220日齢

(令和5年2月10日現在)

③ 発生確認日

令和5年2月10日

④ 農場見取図



(2) 現地疫学調査実施年月日

令和5年2月10日

(3) 農場の周辺環境・農場概況

- ① 当該農場は平野部に位置し、付近は水田に囲まれている。調査時、農場周辺の水田ではアオサギが確認された。
- ② 当該農場は主に雛の生産を行うあひる農場であり、あひるの雛を他農場に出荷するほか、アイガモ農法用のアイガモの雛を稲作農家に出荷するとともに、製薬メーカー等に種卵を出荷していた。なお、調査時はアイガモ農法用の雛の出荷は始まっていなかった。
- ③ 当該農場には開放家きん舎9棟（うち6棟が採卵舎、3棟が育成舎）とウインドウレスの育雛舎1棟があり、発生時は開放家きん舎8棟において、あひる又はアイガモが飼養されていた。
- ④ 衛生管理区域外には孵卵舎が併設されている。

- ⑤ 当該農場では令和3年1月28日に高病原性鳥インフルエンザの発生が確認された令和2年度シーズン国内37例目の発生農場であった。
- (4) 通報までの経緯・発生時の状況
- ① 国内65例目及び69例目の発生に伴い1月28日に実施した検査において陰性が確認されていた。
  - ② 飼養管理者によると、2月9日に発生舎（通報時450日齢）の産卵数が約6割落ち込んでいるのを発見したことから、家畜保健衛生所に通報したとのこと。
  - ③ 死亡状況には変化はなかったとのこと。また、通報後に確認したところ他の1家きん舎でも産卵数が5割程度低下していたとのこと。
  - ④ 調査時には、発生舎の殺処分は終了していたが、これ以外の確認した採卵舎4棟全てで神経症状を示すあひるや死亡あひるが認められた。一方、育成舎2棟においては、明らかな異状は認められなかった。
- (5) 管理人及び従業員
- ① 当該農場では、従事者3名が飼養管理を行っており、鶏舎ごとに担当が概ね決まっており、集卵と卵の洗浄、餌や敷き藁の補充といった飼養管理、死亡鳥の回収、排水口の清掃などの作業を行っていた。
  - ② ①の従事者とは別に、2名が孵卵施設を管理しており、この2名が家きん舎に立ち入ることは殆どなかった。
- (6) 農場の飼養衛生管理
- ① 農場入口には立入禁止の看板・柵を設置し、車両が当該農場に出入りする際には、農場入口の動力噴霧器で消毒を行っていた。
  - ② 飼養管理者によると、従業員は、衛生管理区域外に車を停めた後、農場内の更衣室で農場専用の作業着、長靴及び手袋に交換してから衛生管理区域に入っていたとのこと。外来業者が立ち入る際は、従業員と同様の衛生対策を実施しており、また、立入りの都度、立入り名簿に記帳していたとのこと。
  - ③ 従業員が家きん舎、集卵室等に入る際には、建物ごとにそれぞれ専用の長靴・手袋を用いていたとのこと。家きん舎に入る際は、前室にて踏込み消毒、家きん舎専用長靴への履き替え、手袋の消毒を行っていたとのこと。外来業者が立ち入る際は、飼養管理者立ち合いの上、従業員と同様の消毒等の衛生対策を実施していたとのこと。
  - ④ 家きん舎横には飼料タンクが設置されており、当該タンク上部には蓋が設置されていた。飼料タンク以外の餌は使用されていなかった。
  - ⑤ 飼養家きんへの給与水は、地下水をくみあげ、塩素消毒を行った上で使用していたとのこと。
  - ⑥ 育雛舎を除く家きん舎には水飲み場が設置されており、水飲み場の下は金網となっていた。金網部分から家きん舎外に流れた排水は、農場内の排水路を通して2か所の汚水マスにたまる構造となっていた。飼養管理者によると、1日1回、汚水マスに消毒剤を投入していたとのこと。
  - ⑦ 敷料のわらは保管庫から2週間に1回程度フォークリフトで家きん舎近くまで運び、防鳥ネットが設置された箇所から手作業で家きん舎に立ち入ることなく内部に搬入していたとのこと。直近の搬入は令和4年末とのこと。
  - ⑧ 集卵は毎朝手作業で行っており、家きん舎ごとにケースに卵を回収し、洗卵所へ運搬していたとのこと。生産された種卵は、浸漬消毒と消毒液による洗浄を行ったあと、貯卵、孵卵し、雛の出荷の際には使い捨ての段ボールを使用していたとのこと。
  - ⑨ 飼養管理者によると、当該農場では、家きん舎単位又は家きん舎内の仕切り単位でオールアウトし、家きんの糞の除去や洗浄・消毒を実施していたとのこと。直近21日以内の導

入、家きん舎間の移動、出荷は行っていない。

- ⑩ 家きんの糞は農場内の堆肥場に一時保管したあと、数か月をかけて農場内の大型コンポスト装置で処理していた。また、死亡家きんや孵卵後の卵殻等については、保管せずに直接コンポストで処理していた。堆肥場にある未処理の糞や敷料等は防鳥ネットで覆っていた。仕上がった堆肥は、敷地内の畑に散布しており出荷は行っていなかった。
- ⑪ 家きん舎周辺に石灰を散布していたほか、農場入口には消石灰帯を設けていた。

(7) 野鳥・野生動物対策

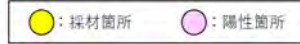
- ① 育雛舎以外の家きん舎は、家きん舎の両側面に開口部があり、片側は金網、もう片側は金網と防鳥ネットが交互に設置されていたが、いずれも外側にロールカーテンがあり、飼養管理者によると、冬季は常に閉鎖していたとのこと。この際、換気はロールカーテン上側の金網部分から行っていた。
- ② 発生舎側面の金網や防鳥ネットの隙間は多くが補修されていたが、一部に隙間が認められた。また、水飲み場下の金網と鶏舎枠との間や、壁面下部等の数か所に3 cm程度の隙間が認められた。
- ③ 飼養管理者によると、農場内ではカラスを見ることは殆どないとのこと。また、家きん舎内でネズミを見ることはないが、金網などにネズミのかじり跡を見ることはあるとのこと。

(8) 環境サンプル

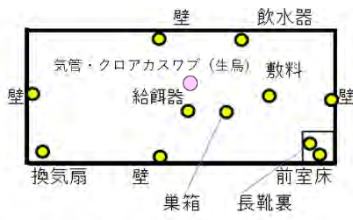
環境検査材料リスト（下線部はウイルスが検出された検体）

採材場所	採取したサンプル
非発生舎（6号舎）	<u>気管・クロアカスワブ（生鳥）</u> 、壁、長靴裏、前室床、巣箱、給餌器、飲水器、敷料
発生鶏舎（5-1号舎）	<u>気管・クロアカスワブ（生鳥）</u> 、壁、長靴裏、前室床、巣箱、給餌器、飲水器、敷料、換気扇
未発生舎（5-2号舎）	<u>気管・クロアカスワブ（生鳥）</u> 、壁、長靴裏、前室床、巣箱、給餌器、飲水器、敷料
未発生舎（4-1号舎）	<u>気管・クロアカスワブ（生鳥）</u> 、 <u>気管・クロアカスワブ（死鳥）</u> 、壁、長靴裏、前室床、飲水器、敷料
未発生舎（3-1号舎）	<u>気管・クロアカスワブ（生鳥）</u> 、 <u>気管・クロアカスワブ（死鳥）</u> 、壁、長靴裏、前室床、巣箱、給餌器、飲水器、敷料
未発生舎（3-2号舎）	<u>気管・クロアカスワブ（生鳥）</u> 、壁、長靴裏、前室床、巣箱、給餌器、飲水器、敷料
未発生舎（2号舎）	<u>気管・クロアカスワブ（生鳥）</u> 、壁、長靴裏、前室床、飲水器、敷料
未発生舎（1号舎）	<u>気管・クロアカスワブ（生鳥）</u> 、壁、長靴裏、前室床、巣箱、給餌器、飲水器、敷料、換気扇
排水樹	水1、水2、水3

【発生鶏舎採材場所】



< 5-1号鶏舎 >

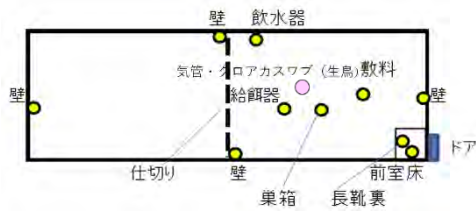


【発生鶏舎以外の採材場所】

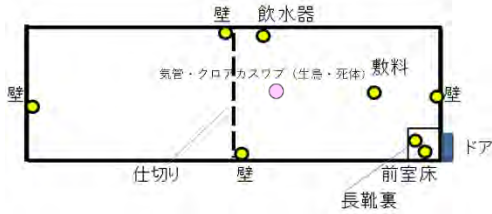
< 6号鶏舎 >



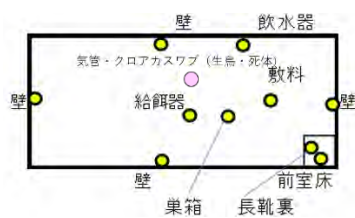
< 5-2号 >



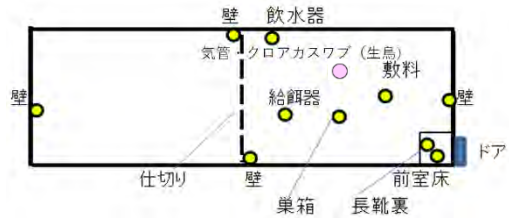
< 4-1号 >



< 3-1号 >



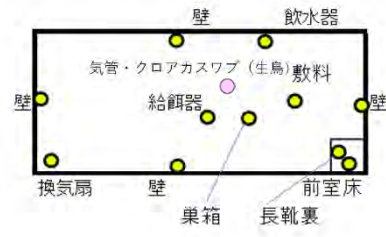
< 3-2号 >



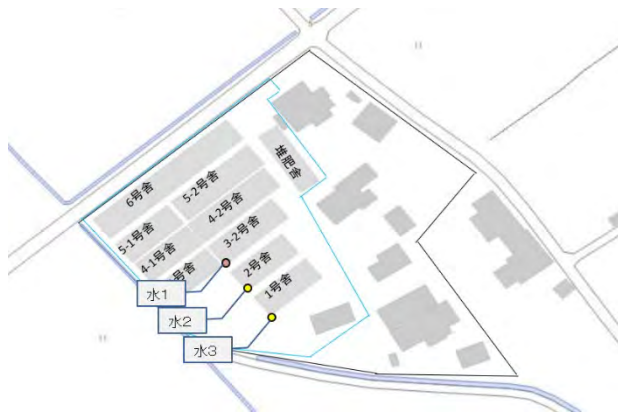
< 2号 >



< 1号 >



< 排水桝 >



76. 茨城県6例目（坂東市）の事例

(1) 概要

① 所在地

茨城県坂東市

② 飼養状況

採卵鶏 約116万羽

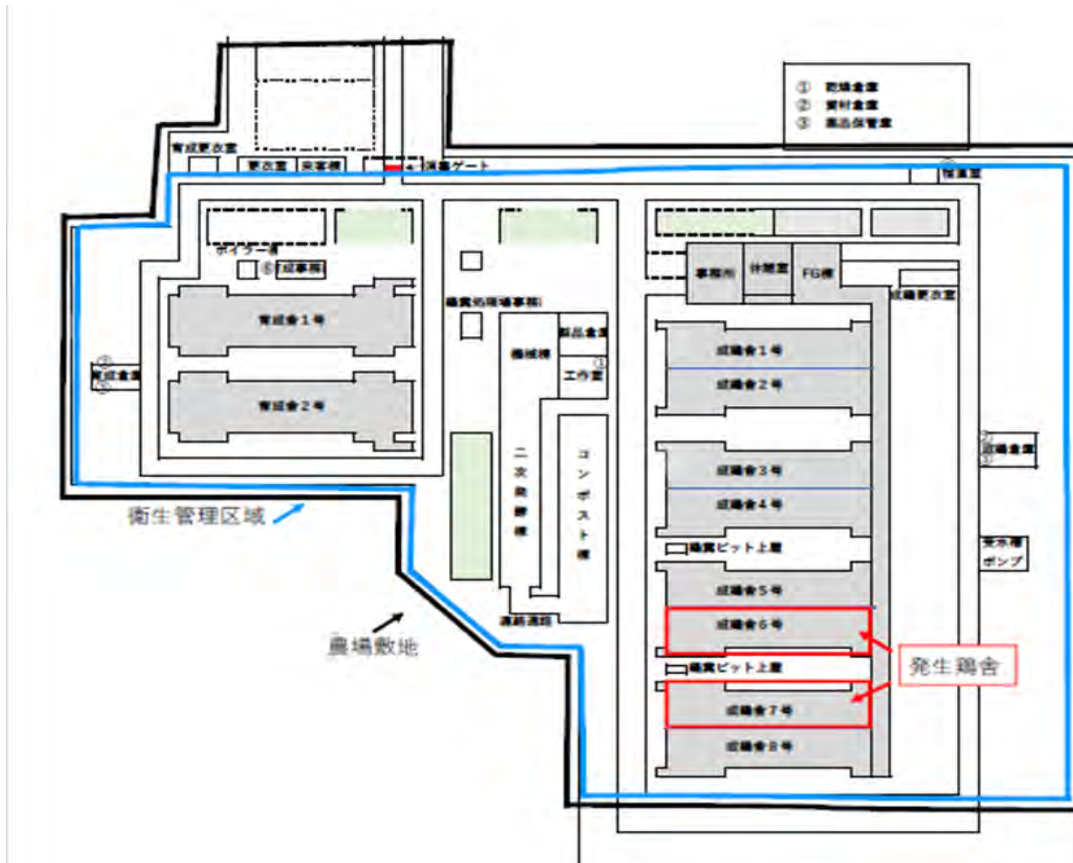
鶏舎	飼養羽数	日齢
育成舎1号	129,231羽	18-25日齢
育成舎2号	130,010羽	99-106日齢
成鶏舎1号	127,336羽	179日齢
成鶏舎2号(空舎)	—	—
成鶏舎3号	126,788羽	631日齢
成鶏舎4号	127,181羽	558日齢
成鶏舎5号	128,439羽	481日齢
成鶏舎6号<発生鶏舎>	129,996羽	407日齢
成鶏舎7号<発生鶏舎>	129,907羽	330日齢
成鶏舎8号	128,832羽	253日齢

(令和5年2月10日現在)

③ 発生確認日

令和5年2月10日

④ 農場見取図



(2) 現地疫学調査実施年月日

令和5年2月11日

(3) 農場の周辺環境・農場概況

- ① 当該農場周囲には田畑と林、工場、ソーラーパネルがあり、産業廃棄物置き場に隣接している。
- ② 発生農場西側を流れる、幅2～3mの川ではカモ類を確認できず、農場の北西側におよそ2km離れたゴルフ場の池で、マガモ、カルガモ、コガモがそれぞれ数十羽確認された。
- ③ 当該農場はウインドレス鶏舎10棟（育成舎2棟、成鶏舎8棟）からなり、発生時は空舎の1棟を除き、1鶏舎当たり約13万羽の採卵鶏が飼養されていた。発生鶏舎は成鶏舎2棟で、背中合わせの直立8段ケージが6列あり、1ケージ当たりの飼養羽数は約22羽であった。

(4) 通報までの経緯・発生時の状況

- ① 飼養管理者によると、各発生鶏舎での1日の平均死亡羽数は15羽から多くとも20羽程度であり、1ケージで複数羽の死亡はなかったが、2月9日の午前中に鶏舎の見回りを行ったところ、成鶏舎2棟で、いずれも1ケージに4羽の死亡が確認されたとのこと。農場のマニュアルでは、1ケージで2羽以上死亡した場合は鳥インフルエンザの自主検査をすることとしており、簡易検査を実施したところ2鶏舎ともに陽性であったことから、家畜保健衛生所へ通報したとのこと。
- ② 発生が確認されたケージは、2鶏舎とも舎内の中央付近にあり、それぞれ最下段と上から2段目に位置していた。
- ③ 調査時には、一方の発生鶏舎では、初発ケージ以外に死亡鶏や衰弱鶏は認められなかった。もう一方の鶏舎では、初発ケージの他、隣接するケージでも死亡鶏が認められた。それ以外の飼養鶏に異状は認められなかった。

(5) 管理人及び従業員

- ① 農場によると、当該農場では約68名の従業員のうち約23名が成鶏舎、約13名が育成舎の管理を担当しており、その他の従業員は集卵作業、鶏糞乾燥作業等に從事していた。成鶏舎と育成舎の担当者は分かれており、農場へ入場する更衣室も分かれているとのこと。廃鶏出荷時には育成舎担当者も出荷作業に從事することがあるが、その場合、その者は担当の育成舎には立ち入らず、自宅へ直帰させるとのこと。
- ② 成鶏担当の担当鶏舎は固定されておらず、当日の出勤者の間で、日々の担当鶏舎が割り振られていたとのこと。なお、鶏舎内作業担当者と集卵担当・鶏糞関係担当者は完全に分けられており、鶏舎内作業担当者以外の従業員が鶏舎内に立入ることはないとのこと。

(6) 農場の飼養衛生管理

- ① 農場によると、従業員が農場に入る際には、駐車場に隣接したワンウェイ構造の更衣室で場内専用の作業着・長靴への着替え、手指消毒を実施し、踏込消毒槽を通過した上で農場内に入場していた。鶏舎作業担当従業員が鶏舎に入る際には、さらに鶏舎入口のワンウェイ構造の更衣室で鶏舎専用の作業着・長靴への着替え、手指消毒、手袋の着用を実施しているとのこと。作業着は、汚れが付いた場合及び2時間ごとの休憩時に交換しているとのこと。
- ② 農場内に立ち入る外来者には、2週間養鶏場に立ち入っていないことを確認し、畜産関係者の場合には来場前に入浴してくるよう指示しているとのこと。その上で、鶏舎に入る際は、来場者用更衣室にてシャワーを浴びてから、農場内専用作業着と長靴の着用を行い、手指消毒を行い衛生管理区域に立入るとのこと。鶏舎に立入らない飼料配送担当者等については、車両消毒ゲート脇のプレハブにて農場内専用作業着と長靴の着用を行い、手指消

毒と踏込消毒を行い、運搬車両への場内専用フロアマットの設置を行なった上で衛生管理区域に入場しているとのこと。

- ③ 車両出入口は農場入口の1か所のみであり、日中は守衛が車両の出入りを管理、夜間は施錠しているとのこと。また、出入りする全ての車両について、設置された消毒ゲートで上下左右から車両消毒を実施しているとのこと。
- ④ 踏込消毒槽（アストップ1000倍）は1日2回以上交換しているとのこと。
- ⑤ 鶏舎の換気について、夏は鶏舎前面の入気口と奥側の排気ファンによるトンネル換気、冬は前面のパネルは閉鎖し、外気温に応じて自動で開閉するインレットを通じた天井からの入気と排気ファンで行なわれている。調査時には発生鶏舎では3～4台のファンが稼働していた。
- ⑥ 鶏舎構造は屋根裏のあるモニター構造であり、モニター部入気口には金網が張られ、その外側から不織布のフィルターを張っているとのこと。屋根裏は鶏舎単位のオールアウト時に洗浄しているとのこと。
- ⑦ 糞乾装置について、夏は外から入気しているが、現在は外側をパネルで覆って塞いでおり、鶏舎内から入気しているとのこと。
- ⑧ 成鶏舎の鶏糞はベルトコンベアで直接堆肥舎へ搬送され、コンポストで発酵後、二次発酵棟へ搬送されるとのこと。完熟堆肥は袋詰め又はフレコン詰めされ出荷されるとのこと。
- ⑨ 午前中の健康観察時に確認した死亡鶏は、ペール缶に集められ、除糞ベルトを稼働する際にベルトに落として鶏糞と一緒に回収し、直ちにコンポストに投入しているとのこと。
- ⑩ 育成舎の雛を120日齢で成鶏舎に移動する際に、育成舎の従業員が成鶏舎に立入ることはないとのこと。また、移動に使用した車両やケージは場内に設置された動力噴霧器で消毒してから育成舎エリアに戻しているとのこと。
- ⑪ 当該農場では鶏舎単位でのオールインオールアウトを実施しており、空舎期間を20日程度設けているとのこと。直近の廃鶏出荷（約700日齢）は2号舎からで、2月4日から4日間で行われたとのこと。出荷の際には、移動用ラックに出荷鶏を搭載して1km先の出荷場へ搬出し、ラックは洗浄・消毒してから農場へ持ち帰るとのこと。出荷期間中、出荷場で作業する従業員は固定し、出荷場で作業している従業員が農場に立入ることがないようにしているとのこと。
- ⑫ 飼料タンクには蓋があり、防鳥ワイヤーが張られていた。飼料の補充はほぼ毎日され、作業は夜間に実施されるとのこと。
- ⑬ バーコンベアはすべて建屋の中を通り、屋外に開放している箇所はなかった。
- ⑭ 農場内に持ち込まれる備品等は、消毒ゲート前のプレハブでホルマリン燻蒸しているとのこと。

#### (7) 野鳥・野生動物対策

- ④ 農場によると、ネズミ対策として粘着シートと殺鼠剤を設置しており、農場全体で1か月に10匹程度のハツカネズミが捕らえられるが、日常的にラットサインは見かけないとのこと。調査時もラットサインは確認されなかった。
- ⑤ 鶏舎に野生動物が侵入可能な間隙は確認されなかった。
- ⑥ 農場内には以前はネコが侵入していたが、農場周囲をフェンスで囲み、フェンス下部をスレートで塞ぎ、上部は有刺鉄線と電柵を追加したところ、これらの動物の侵入はなくなったとのこと。フェンスの破損や通電は毎日確認しており、フェンス下部に動物が穴を掘った跡なども見られないとのこと。
- ⑦ 農場敷地に隣接する林でカラスをよく見かけ、30羽程度が朝夕日常的に農場上空を通過するとのこと。カラス対策のために、機械棟の屋根にレーザーによる鳥類忌避装置が設置されていた。調査時には、ハシボソガラスやハシブトガラス数羽、ハクセキレイ、ヒヨドリ、キジバト等の野鳥が農場内で確認された。

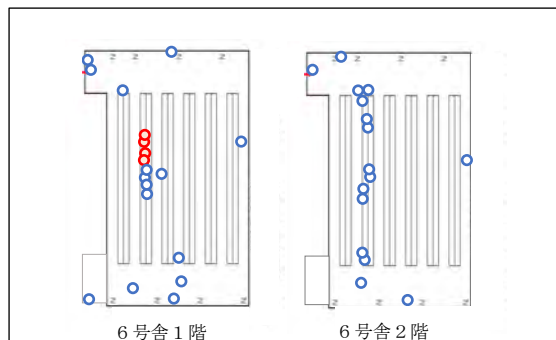


(8) 環境サンプル

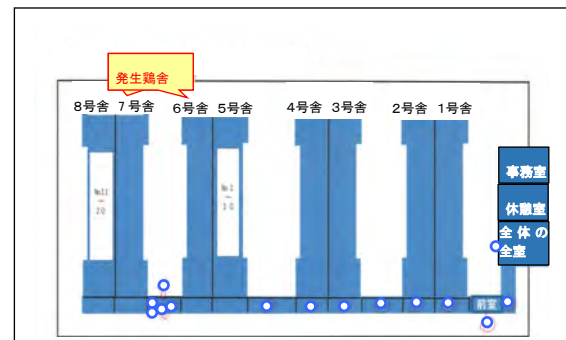
環境検査材料リスト (下線部はウイルスが検出された検体)

採材場所	採取したサンプル
発生鶏舎 (成鶏舎 7号舎)	6-7号舎廊下7号舎側の入口付近、6-7号舎廊下6号舎側の入口付近、6-7号舎廊下7号舎側の壁、6-7号舎廊下バーコン下のくず受け、発生ケージ、発生ケージ集卵ベルト、天井入気口(インデット)、2階奥中央の換気扇、2階左奥壁、2階右側真ん中壁、2階鶏糞乾燥用ダクト近くの埃、2階バーコン、2階集卵ベルト、2階左側真ん中壁、1階飲水器、1階ケージ周辺、1階奥中央の換気扇、1階壁、1階床、1階後方除糞ベルト、6-7号への廊下側の壁、 <u>気管・クロアカスワブ(生鳥)</u>
発生鶏舎 (成鶏舎 6号舎)	1階ケージ周辺、1階飲水器、1階集卵ベルト、1階ケージ付近、1階換気扇、1階除糞ベルト、1階壁、1階床、1階吸気口、1階バーコン下のくず受け、2階吸気口、2階床、2階上天井の入気口、2階換気扇、2階壁、2階除糞ベルトカーテン、1階鶏糞ピット、1階ケージ、1階専用台車タイヤ、1階餌の機械、 <u>気管・クロアカスワブ(生鳥)</u>
未発生舎 (成鶏舎 5号舎)	気管・クロアカスワブ(死亡鶏)
未発生舎 (成鶏舎 8号舎)	気管・クロアカスワブ(死亡鶏)

【発生鶏舎採材場の見取り図】



【発生鶏舎以外の採材場所】



○ : 採材場所、 ○ : 陽性場所

77. 福岡県4例目（福岡市）の事例

(1) 概要

① 所在地

福岡県福岡市

② 飼養状況

採卵鶏 243,252羽

鶏舎	飼養羽数	日齢
A 1	50,086羽	233日齢
A 2	48,902羽	415日齢
A 3 (空舎)	—	—
A 4	49,725羽	316日齢
A 5	47,166羽	526日齢
A 6 <発生鶏舎>	47,373羽	618日齢

(令和5年3月1日現在)

③ 発生確認日

令和5年3月2日

④ 農場見取図



(2) 現地疫学調査実施年月日

令和5年3月2日

(3) 農場の周辺環境・農場概況

- ① 当該農場は標高約 50m の尾根上にあり、周辺は林に囲まれていた。
- ② 農場西側には複数のため池があり、調査時、農場から 840m 離れたため池でホシハジロ 6 羽、キンクロハジロ 2 羽、コガモ 3 羽、農場から 1.3km 離れたため池でカルガモ 2 羽、農場から 1.6km 離れた海岸でカルガモ 16 羽をそれぞれ目視確認した。
- ③ 当該農場はウインドウレス鶏舎 3 棟（1 棟の内部は壁で仕切られ 2 鶏舎）からなり、各鶏舎に背中合わせ直列 8 段 3 列ケージ（各階 4 段ずつ）を有する。発生時には空舎 1 鶏舎を除いて採卵鶏が飼養されており、発生鶏舎は東端に位置していた。
- ④ 衛生管理区域内の東側に堆肥舎、北西側に鶏糞発酵舎等、衛生管理区域外の農場西側に GP センターが位置していた。

(4) 通報までの経緯・発生時の状況

- ① 飼養管理者によると、通常の 1 日当たりの死亡羽数は 1 鶏舎当たり 10～20 羽であったところ、2 月 28 日に発生鶏舎（通報時 618 日齢）の 2 階中央部付近、下から 1～2 段目のケージに固まって死亡が認められ、死亡羽数も鶏舎全体で 90 羽以上であったため、管理獣医師へ連絡したとのこと。死亡鶏 4 羽の解剖の結果、胸筋白色化 3 羽、脾臓赤色 1 羽、肝出血 1 羽を認めたが、周辺のケージを含めて死亡以外の異状が認められなかったことから経過観察としたとのこと。
- ② 翌 3 月 1 日に飼養管理者が確認した際、1 階でも多数の死亡が認められたことから、家畜保健衛生所に通報したとのこと。通報を優先したことから正確な死亡羽数については不明とのこと。発生鶏舎以外では異状は認められなかったとのこと。
- ③ 調査時には発生鶏舎全域で死亡鶏や沈鬱を呈する鶏が認められ、発生鶏舎と同一棟内の隣接鶏舎においても 2 階の発生鶏舎に隣接した列の中央部付近の下から 1～2 段目を中心に死亡鶏や沈鬱を呈する鶏が多数確認された。それ以外の 3 鶏舎では異状は認められなかった。

(5) 管理人及び従業員

- ① 当該農場では 5 名の従業員が鶏の飼養管理を行っているとのこと。鶏舎周囲での除糞作業を行うパート職員が 2 名いるが、鶏舎に入ることはないとのこと。
- ② 飼養管理担当者は 1 日当たり 3～4 名で業務を行い、従業員ごとの担当鶏舎はある程度決まっているものの、担当鶏舎以外の作業を行うこともあるとのこと。発生鶏舎を担当する従業員は同じ日に隣接鶏舎に立ち入ることが多いとのこと。

(6) 農場の飼養衛生管理

- ① 農場敷地はスチールフェンスや防風柵で囲われ、農場入口及び衛生管理区域境界には立入禁止看板が設置されていた。飼養管理者によると、日常的に農場内に石灰散布を実施していたとのこと。車両が農場に入る際は、農場入口に設置された車両消毒ゲートにより消毒を実施していたとのこと。
- ② 鶏の飼養管理を行う従業員は自家用車で出勤し、農場外にある従業員駐車場で入場専用の履物に履き替え、歩行者用入口に設置された踏込み消毒槽（逆性石けん、毎日交換、以下同じ。）を通過して成鶏管理事務所へ移動していた。事務所で踏込み消毒後、手指の洗浄・消毒を行い、衛生管理区域専用作業着及び長靴を着用後、踏込み消毒を実施し、隣接する洗濯施設で鶏舎専用作業着を回収してから衛生管理区域に入場していた。鶏舎に入る際には、踏込み消毒を行った後に鶏舎前室のすのこの手前で衛生管理区域専用長靴を脱ぎ、更衣スペースへ移動して手指消毒と各鶏舎専用作業着への更衣、全身の噴霧消毒を行い、鶏

舎に常備している鶏舎専用長靴に履き替えて踏込み消毒を行っていたとのこと。

- ③ 飼料運搬業者、堆肥運搬業者等の鶏舎に立ち入らない来場者は、持参した農場専用長靴に履き替えてから下車し作業を行っているが、農場専用衣服への更衣は行っておらず、堆肥運搬業者のうち一部は靴の履き替えを行っていなかったとのこと。鶏群の導入及び出荷、オールアウト後の鶏舎メンテナンスの際には外部作業者が鶏舎に立ち入るが、農場が準備した鶏舎専用長靴及び作業着を着用し、従業員と同様の手順で鶏舎へ立ち入っていたとのこと。
- ④ 当該農場は約720日齢まで鶏を飼養しており、約481日齢で強制換羽を実施していた。鶏群をオールアウトした後、洗浄・消毒し、空舎期間は約1か月設けていた。直近の出荷は2月8日。
- ⑤ 発生鶏舎内に目立った隙間や破損は確認されなかった。調査時、鶏舎の排水口の開口部に蓋はされていなかった。
- ⑥ 鶏舎内の温度センサーを基に自動制御されている鶏舎妻側（北側）の換気扇から排気し、鶏舎平側軒裏の吸気口から吸気された空気は屋根裏を通り鶏舎2階天井のスリットから給気されていた。屋根裏は鶏舎ごとの仕切りはなく棟内で共有されていた。鶏舎妻側（南側）に入気口が設置されていたが、冬季はシャッターで閉鎖していた。
- ⑦ 飼料タンク上部には蓋が設置されており、鶏舎内のラインを通して自動で給餌する構造となっていた。調査時には発生鶏舎の隣接鶏舎の飼料タンクにおいて、飼料が少量こぼれているのを認めた。
- ⑧ 給与水は井戸水を使用し、次亜塩素酸ソーダによる消毒を実施していたとのこと。
- ⑨ 集卵ベルトの鶏舎外に露出する部分は上部と側面が金属板で覆われ、GPセンターとの接続部には遮蔽板が設けられていたが、鶏舎との接続部には設けられていなかった。
- ⑩ 鶏糞は、鶏舎ごとに4日に1回の頻度で除糞ベルトにより鶏舎外に搬出され、鶏糞専用のダンプカーを用いて除糞ピットから衛生管理区域内にある堆肥舎へ運搬されていた。ピットの鶏舎内開口部は稼働時以外は板で閉鎖されていた。堆肥舎までの運搬作業は各鶏舎の飼養管理担当者が実施し、除糞作業を行う際は鶏舎奥側の入口から鶏舎内に立ち入り、消石灰槽を踏んでいたとのこと。直近の搬出は2月22日。
- ⑪ 鶏の健康観察は毎日実施しており、死亡鶏は鶏舎奥側へ集めた後、衛生管理区域内にある死亡鶏保管庫に蔵置され、1か月に1回程度運搬業者が化製場へ搬送するとのこと。直近の搬出は1月26日。
- ⑫ 鶏舎内の掃除は1週間に2回程度実施しており、1か月に1～2回程度は消毒も実施していたとのこと。

#### (7) 野鳥・野生動物対策

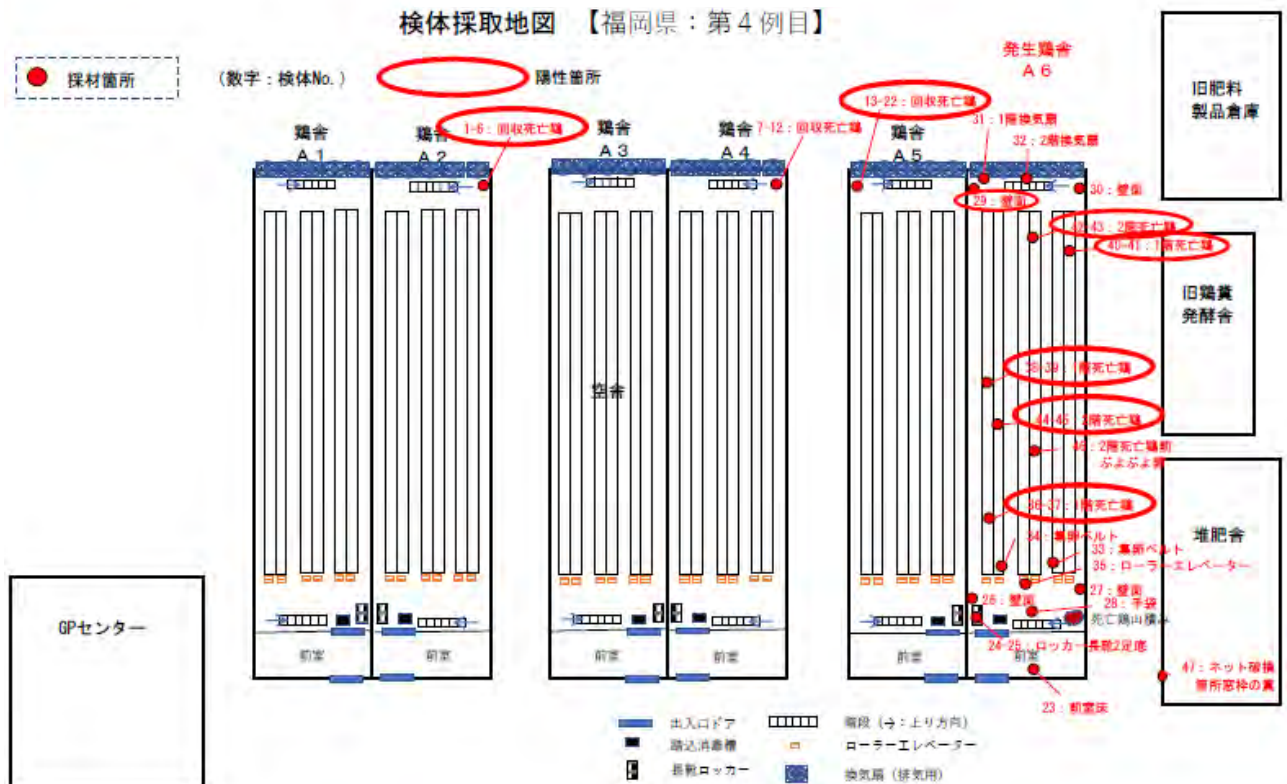
- ① 飼養管理者によると、日ごろネズミを見ることはなかったが、ネズミ駆除業者と契約しており、時折ネズミ捕獲やラットサインの報告があるとのこと。調査時、鶏舎内でラットサインは確認されなかった。
- ② 飼養管理者によると、農場周辺にイノシシが多く生息しており、調査時には農場内にイノシシのものと思われる掘り起こしが複数箇所を確認された。
- ③ 農場周辺の林はカラス類のねぐらになっており、早朝及び夕方は多数のカラス類を見とのこと。調査時には、衛生管理区域内でスズメ約30羽、カラス類5羽、イソヒヨドリ1羽を目視確認した。スズメはこぼれた飼料を食べていた。
- ④ 堆肥舎の全面に防鳥ネットが張られていたが、大きい部分で約4mの破損箇所が認められた。堆肥舎内に野鳥のものと思われる糞が確認された。発酵舎内ではカラス類の侵入を認めた。

(8) 環境サンプル

環境検査材料リスト (下線部はウイルスが検出された検体)

採材場所	採取したサンプル
A 1	—
A 2	気管・クロアカスワブ (死亡鶏) (No. 1-6)
A 3	—
A 4	気管・クロアカスワブ (死亡鶏) (No. 7-12)
A 5	気管・クロアカスワブ (死亡鶏) (No. 13-22)
A 6 <発生鶏舎>	前室床 (No. 23)、長靴底 (No. 24-25)、壁 (No. 26-27, 29-30)、 作業用手袋 (No. 28)、換気扇 (No. 31-32)、集卵ベルト (No. 33-35)、気管・クロアカスワブ (死亡鶏) (No. 36- 45)、卵 (No. 46)
堆肥舎	糞 (No. 47)

【採材場所見取図】



78. 新潟県4例目（胎内市）の事例

(1) 概要

① 所在地

新潟県胎内市

② 飼養状況

採卵鶏 約68万羽

鶏舎	飼養羽数	日齢
1号舎	85,837羽	696日齢
2号舎	88,040羽	615日齢
3号舎	90,727羽	444日齢
4号舎	107,735羽	276日齢
5号舎	109,064羽	220日齢
6号舎	109,742羽	121日齢
7号舎 <発生鶏舎>	95,419羽	360日齢

(令和5年3月5日現在)

③ 発生確認日

令和5年3月6日

④ 農場見取図



(2) 現地疫学調査実施年月日

令和5年3月6日

(3) 農場の周辺環境・農場概況

- ① 当該農場は、平野部に位置し、付近は水田や林に囲まれている。



- ② 農場から 250m 程度離れたところに、用水路が流れている。
  - ③ 当該農場には 7 棟の成鶏舎があり、全て 2 階建てのウインドウレス鶏舎で各階背中合わせの直立 4 段 5 列ケージであった。発生鶏舎は、過去に鶏舎として使用していた倉庫 2 棟に隣接しており、鶏舎の中では最も端に位置していた。
  - ④ 発生時には、全 7 鶏舎で採卵鶏が飼養されていた。
- (4) 通報までの経緯・発生時の状況
- ① 飼養管理者によると、発生鶏舎（通報時 360 日齢）の 1 日当たりの死亡羽数は平均 15 羽程度であったところ、3 月 5 日朝の健康観察の際に、発生鶏舎 1 階の入口から 2 列目の手前から 16 ケージ目の上から 2 段目のケージで、まとめて死亡（約 10 羽）が確認され、隣接ケージで 5 羽、鶏舎全体で 65 羽の死亡が確認されたことから、家畜保健衛生所に通報したとのこと。家畜保健衛生所が実施した簡易検査で陽性が確認された。
  - ② 疫学調査時、当該鶏舎以外の鶏舎では感染を疑う異状は認められなかった。
- (5) 管理者及び従業員
- ① 当該農場では、従業員 5 名が鶏舎での飼養管理を行っており、これと別に、集卵作業のみを行う従業員 10 名と堆肥の管理のみを行う従業員 7 名が従事していた。飼養管理担当者については、担当鶏舎が 1～2 鶏舎決められており、発生鶏舎の担当者は隣接の 1 鶏舎も担当していた。担当者が休みの場合には、他鶏舎の担当者が代わりに担当するとのこと。
  - ② 飼養管理担当者は、担当鶏舎において健康観察・死鳥の回収のほか、鶏舎内の清掃や設備の管理、清掃などの一連の作業を行っていた。
- (6) 農場の飼養衛生管理
- ① 衛生管理区域の境界にはフェンスが設置され、立入禁止表示がされていた。農場敷地には消石灰が散布され、飼養管理者によると鶏舎周囲（入口付近及びファン付近）には毎日消石灰を散布していたとのこと。
  - ② 飼料運搬車両、集卵車両等の車両が農場内に入る際には、入口の車両消毒ゲートで消毒していたとのこと。また、その際、運転室に使い捨てのシートを敷くとともに、運転手は農場専用の長靴に履き替えていたが、手指消毒及び衛生管理区域専用衣服の着用は実施していなかったとのこと。なお、廃鶏出荷の際には、消毒ゲートに加えて動力噴霧器によるタイヤや車両底面の消毒も行っていた。
  - ③ 飼養管理者によると、従業員は、衛生管理区域外の駐車場に駐車し、衛生管理区域に入る際に踏込み消毒及び全身の噴霧消毒を行った後、衛生管理区域内の事務所で踏込み消毒を実施の上、衛生管理区域専用の作業着、長靴及び手袋を着用していたとのこと。
  - ④ 外来者が衛生管理区域に入る際には、車両消毒ゲートの隣の小屋で衛生管理区域専用長靴への交換、手指消毒及び衛生管理区域専用衣服の着用を行っていたとのこと。
  - ⑤ 従業員が鶏舎に入る際は、鶏舎入口で踏込み消毒及び手指消毒を行った後、鶏舎前室で鶏舎専用の長靴に履き替えてから鶏舎内に立ち入っていたとのこと。全ての鶏舎は屋内通路で連結しており、担当鶏舎間を移動する際に鶏舎外に出る必要はなく、長靴の交換等を行っていなかったとのこと。
  - ⑥ 発生鶏舎の換気は、鶏舎奥側にあるファンによって排気し、冬季は鶏舎 2 階部分の側面上部の吸気口から吸気していたとのこと。吸気口は下向きに開口しており、開口部にはワイヤーメッシュが設置されていた。
  - ⑦ 飼料タンクは各鶏舎の横に設置されており、上部には蓋が設置されていた。
  - ⑧ 飼養鶏への給与水は農場内に設置された井戸の地下水を使用しており、自動混入器にて塩素消毒を実施していたとのこと。
  - ⑨ 飼養管理者によると、鶏舎ごとにオールイン・オールアウトを行っており、オールアウトのたびに鶏舎内の清掃・消毒を行っていたとのこと。

- ⑩ 直近では、2月27及び28日に発生鶏舎の隣接鶏舎に鶏を導入しており、系列農場の従業員20名程度が当該農場の鶏舎内で作業を行っていたが、その際、全員、農場専用の長靴、作業着及び手袋を着用していたとのこと。
- ⑪ 鶏糞は、4日ごとに除糞ベルトで堆肥舎に排出し、原則としてその日のうちに農場内のコンポストで処理していた。
- ⑫ 死亡鶏は、各鶏舎の見回り担当者が鶏舎内にまとめて置いておき、2日に1回程度、除糞ベルトを使って堆肥舎に搬出し、鶏糞と混ぜて農場内の専用のコンポストで処理していた。

(7) 野鳥・野生動物対策

- ① 飼養管理者によると、農場周辺で、カラスやネコを見かけることがあるとのこと。調査時にも農場にカラスが飛来していたが、鶏舎内への侵入はなかった。
- ② 飼養管理者によると、業者によるネズミ対策を実施しており、鶏舎内でまれにネズミを見かけることがあるとのこと。調査時には、発生鶏舎及びその他の鶏舎で、ネズミの糞やかじり跡を確認したほか、除糞ベルトや床で死亡しているネズミ及び粘着シートに捕獲されているネズミを確認した。
- ③ 各鶏舎と集卵施設は集卵コンベアで連結されており、鶏舎間は屋内通路の下面を通っていた。さらに、コンベアの下面は二重の防鳥ネットに覆われていた。
- ④ 発生鶏舎の吸気部分の防鳥ネットについて、調査時に穴が散見された。
- ⑤ 集卵ベルトの鶏舎内のケージ端からピットに落下させる部分には覆いが設置されており、鶏舎外の吐出口には、カバーが設置されていた。
- ⑥ 鶏舎から直接鶏糞が搬送される堆肥舎の開口部には防鳥ネットが設置されていたが、完全に覆われていない部分もあり、調査時には堆肥舎内にカラスを確認した。

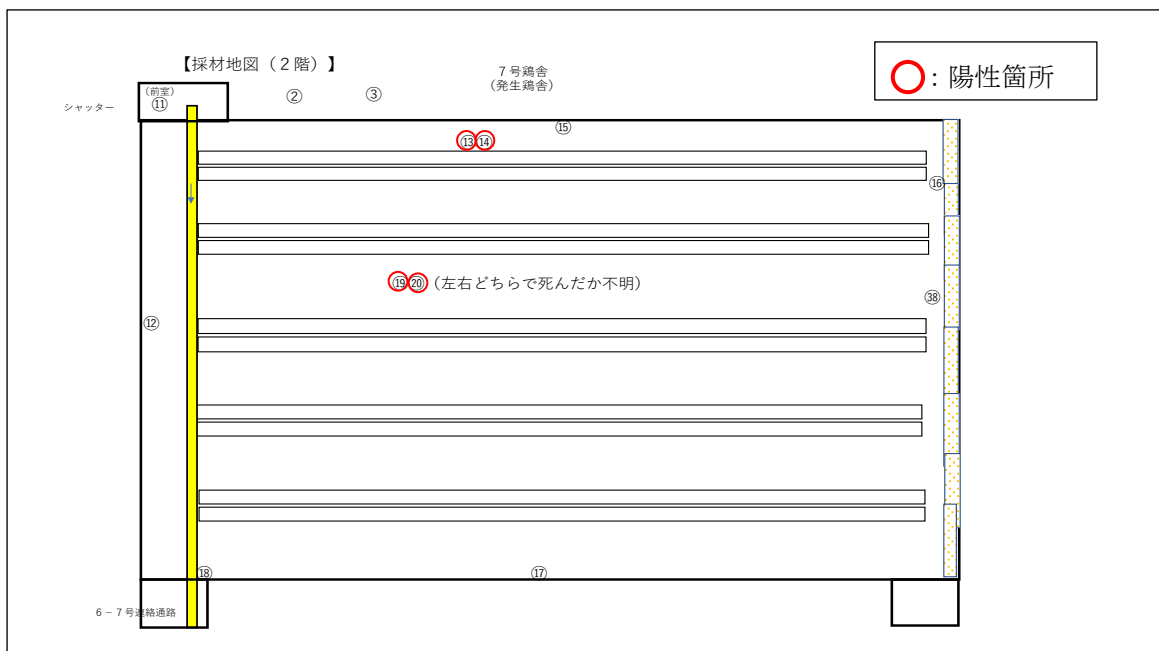
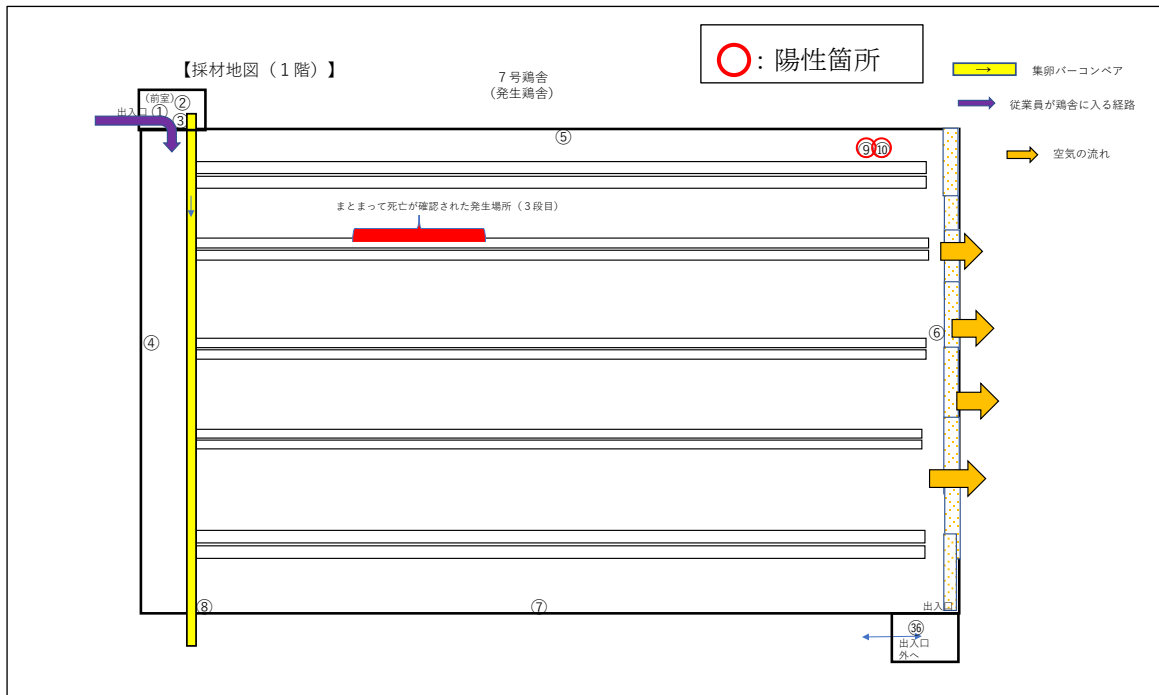
(8) 環境サンプル

環境検査材料リスト（下線部はウイルスが検出された検体）

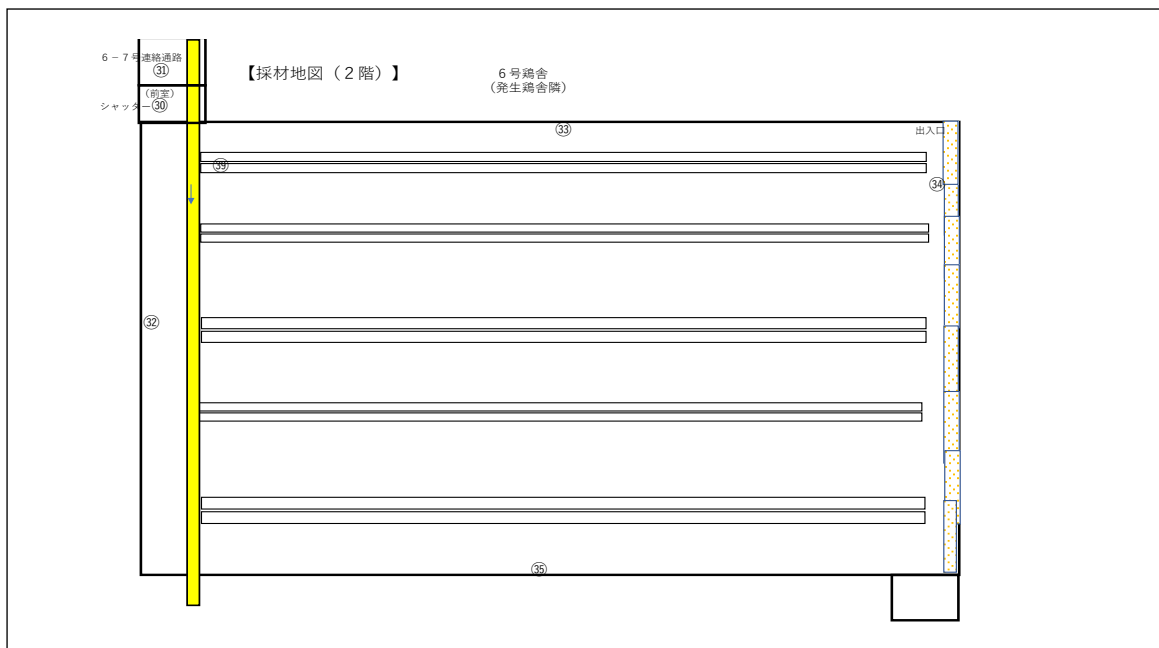
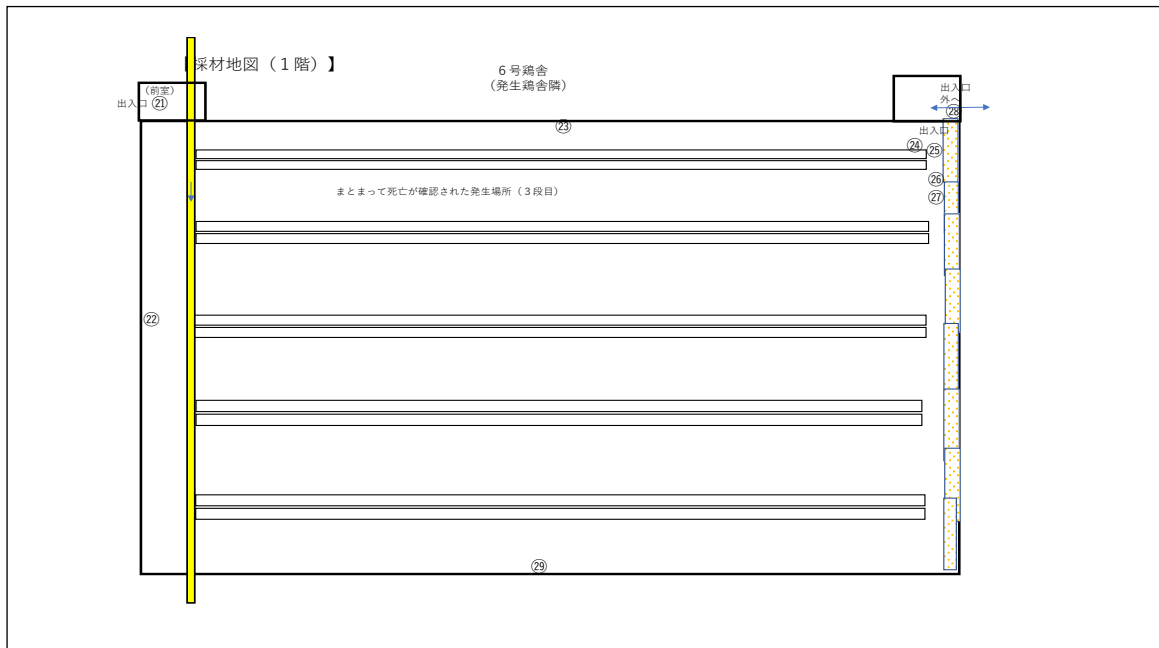
採材場所	採取したサンプル
発生鶏舎（7号舎1階）	前室床、長靴底、作業用手袋、壁、集卵ベルト、 <u>死亡鶏のスワブ（気管、クローアカ）</u>
発生鶏舎（7号舎2階）	前室床、壁、換気扇、集卵ベルト、 <u>死亡鶏のスワブ（気管、クローアカ）</u>
未発生舎（6号舎）	前室床、壁、糞（ネズミ）、換気扇、死亡鶏のスワブ（気管、クローアカ）、長靴底



【発生鶏舎採材場所見取り図】



【発生鶏舎以外の採材場所】（陽性箇所なし）



79. 新潟県5例目（胎内市）の事例

(1) 概要

① 所在地

新潟県胎内市

② 飼養状況

採卵鶏 約33万羽

鶏舎	飼養羽数	日齢
1号舎 <発生鶏舎>	62,917羽	793日齢
2号舎	65,384羽	694日齢
3号舎	67,256羽	648日齢
4号舎	68,376羽	564日齢
5号舎	68,751羽	491日齢

(令和5年3月11日現在)

③ 発生確認日

令和5年3月12日

④ 農場見取図



(2) 現地疫学調査実施年月日

令和5年3月12日

(3) 農場の周辺環境・農場概況

- ① 当該農場は、国内78例目の農場から北に約500mに位置している。
- ② 当該農場は、平野部に位置し、付近は水田や林に囲まれている。
- ③ 当該農場には成鶏舎が5棟あり、いずれも2階建てのセミウインドウレス鶏舎であった。各鶏舎には、背中合わせの直立8段ケージが4山あり、1ケージ当たりの飼養羽数は6羽程度であった。

- ④ 発生鶏舎は5棟のうち最も北に位置していた。発生鶏舎の換気は、外気温に応じて鶏舎側面のロールカーテンの開閉及び鶏舎奥側のファンの稼働が自動で行われているとのこと。調査時には、日中に2階の窓のロールカーテンが上部30～40cm開いた状態で、ファンは回っており、鶏舎横の窓から入気しモニター一部から排気される自然換気を実施していた。
- ⑤ 発生時には、5鶏舎すべてで採卵鶏が飼養されていた。

(4) 通報までの経緯・発生時の状況

- ① 飼養管理者によると、発生鶏舎の1日当たりの平均死亡羽数は約50羽であった。発生鶏舎は、日齢が高いこと（通報時793日齢）及びワクモの影響により元々他の鶏舎より死亡羽数が多い鶏舎だが、まとまった死亡はなかったとのこと。3月11日午前中の健康観察の際に、発生鶏舎の2階最上段、最南側の山の内側の列、中央付近の1ケージで、6羽中5羽のまとまった死亡が確認されたことから、家畜保健衛生所に通報したとのこと。
- ② その後、家畜保健衛生所の職員とともに発生ケージを確認したところ、同ケージ内の残りの1羽も死亡していたとのこと。この時点では周辺ケージでの死亡は確認されなかったとのこと。
- ③ 調査時には、発生ケージの周辺ケージ及びグレーチングを挟んだ1階のケージの数か所で死亡鶏や元気消失を示す生存鶏が認められた。発生鶏舎の他の場所では、まとまった死亡等の異状は見られず、隣接鶏舎でも異状は見られなかった。

(5) 管理人及び従業員

- ① 飼養管理者によると、当該農場には17名の従業員がおり、このうち7名が鶏舎内での飼養管理を行い、その他の10名は、鶏糞処理や集卵作業等に従事していたとのこと。鶏舎管理を行う従業員は、その日毎に担当鶏舎が決められ、同日に他の鶏舎で作業をすることはないとのこと。

(6) 農場の飼養衛生管理

- ① 車両出入口は農場入口の1か所のみで、入口で全ての車両について消毒ゲートで上下左右からの消毒を実施し、衛生管理区域に入っていた。
- ② 従業員は、GP兼更衣室棟の入口で踏み込み消毒及び手指消毒を行った後、棟内用の靴に履き替えてから入棟し、農場専用の作業着を着用していたとのこと。
- ③ 飼養管理者によると、鶏舎管理担当の従業員は、GP兼更衣室棟から連絡通路により鶏舎に向かい、外に出ることなく鶏舎に入るとのこと。その後、鶏舎入口で鶏舎専用長靴への履き替え、踏み込み消毒、衣服の噴霧消毒及び手袋の装着を行うとのこと。なお、鶏舎管理担当が担当鶏舎に向かう際は、各鶏舎間を繋ぐ連絡通路を使って移動しており、各鶏舎を通過する度に長靴の交換、手袋の装着を行うとのこと。
- ④ 飼料運搬業者や集卵業者は、車両消毒ゲートの近くに設置された来場者用更衣室で手指の消毒、農場専用の作業着と長靴を着用し、運転席には消毒済みのフロアマットを敷くとのこと。
- ⑤ 農場敷地の境界には一部を除き塀や電柵が設置され、農場入口に立ち入り禁止表示がされていた。農場内の車両の通路及び鶏舎周囲のアスファルトには消石灰が散布されていた。消石灰は週1回程度散布していたとのこと。
- ⑥ 飼料タンクは各鶏舎の横に設置されており、上部には蓋が設置されていた。飼料の搬入は毎日行われるとのこと。
- ⑦ 飼養鶏への給与水は次亜塩素酸により消毒した井戸水を使用しており、年1回の定期検査も実施しているとのこと。水のタンクには蓋が設置されているとのこと。
- ⑧ 飼養管理者によると、鶏舎ごとにオールイン・オールアウトを行っており、オールアウトのたびに鶏舎内の清掃・消毒を行っていたとのこと。最近の導入、廃鶏出荷はなかったとのこと。

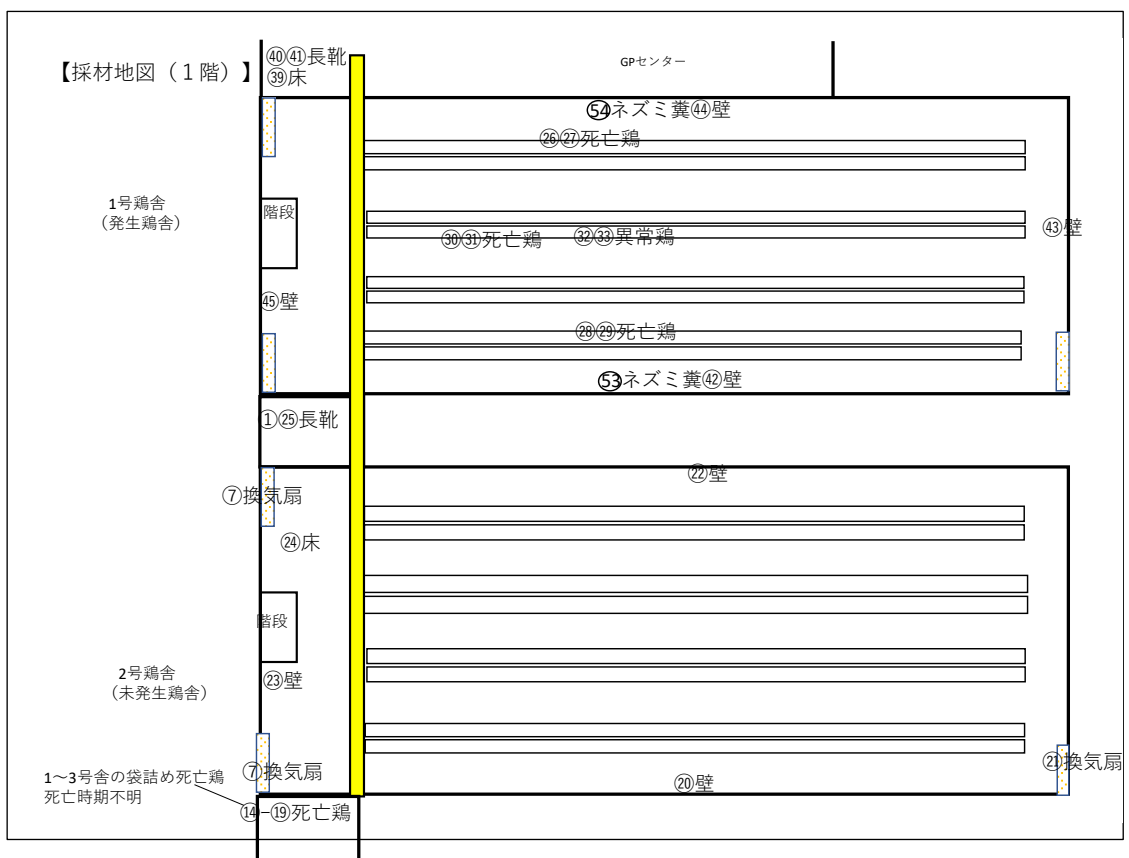
- ⑨ 死亡鶏は、各鶏舎の担当者がポリバケツに集めて各鶏舎前室に置いておき、1日1回自社のショベルカーで回収し、コンポストへ投入するとのこと。
  - ⑩ 鶏糞はコンベアでダンプに積載され、堆肥舎へ運ばれるとのこと。鶏舎からダンプ集積場所までの建屋外を通るベルトラインには覆いが設置されており、除糞ベルト出口には手動のシャッターが設置されていた。鶏糞ベルトは鶏舎毎に4日に1回程度の頻度で稼働させるとのこと。
  - ⑪ 堆肥舎においてコンポストで処理された堆肥は、農場北部のペレット工場へ搬出されるとのこと。なお、同ペレット工場には新潟県内のグループ会社3農場からの堆肥も搬入されるとのこと。堆肥搬入車は、ペレット工場への出入りの際、消毒ゲートで車両消毒、専用長靴への履き替えをしていたとのこと。
  - ⑫ グループ会社の他農場との間で従業員の行き来はないとのこと。重機等の移動も最近はないとのこと。
  - ⑬ 管理獣医師は定期的には訪問せず、また、冬季には農場内には入らないとのこと。
- (7) 野鳥・野生動物対策
- ① 調査時、農場隣接地に湿地があったが、水は浅く、野鳥の飛来は確認されなかった。
  - ② 調査時、農場内に小型の野鳥が飛来していたが、鶏舎内への侵入はなかった。また、カラスが農場上空を飛来していたが、農場内への侵入はなかった。
  - ③ 農場内ではネコやイタチを見かけるが、鶏舎内への侵入はないとのこと。
  - ④ 鶏舎内ではよくネズミを見かけるとのこと。調査時、鶏舎内でネズミ類のものと思われる糞が確認された。ネズミ対策として殺鼠剤を使用しているとのこと。
  - ⑤ 農場隣接地の草を食べさせるため、アルパカ数頭及び山羊約20頭を飼養しているが、農場内へこれらの動物が侵入することはないとのこと。また、最近は降雪等により放牧は行っていないとのこと。
  - ⑥ 農場周囲の電柵は冬季は通電していないとのこと。
  - ⑦ 集卵ベルトはすべて建屋の中を通り、屋外に開放している箇所はなかった。

(8) 環境サンプル

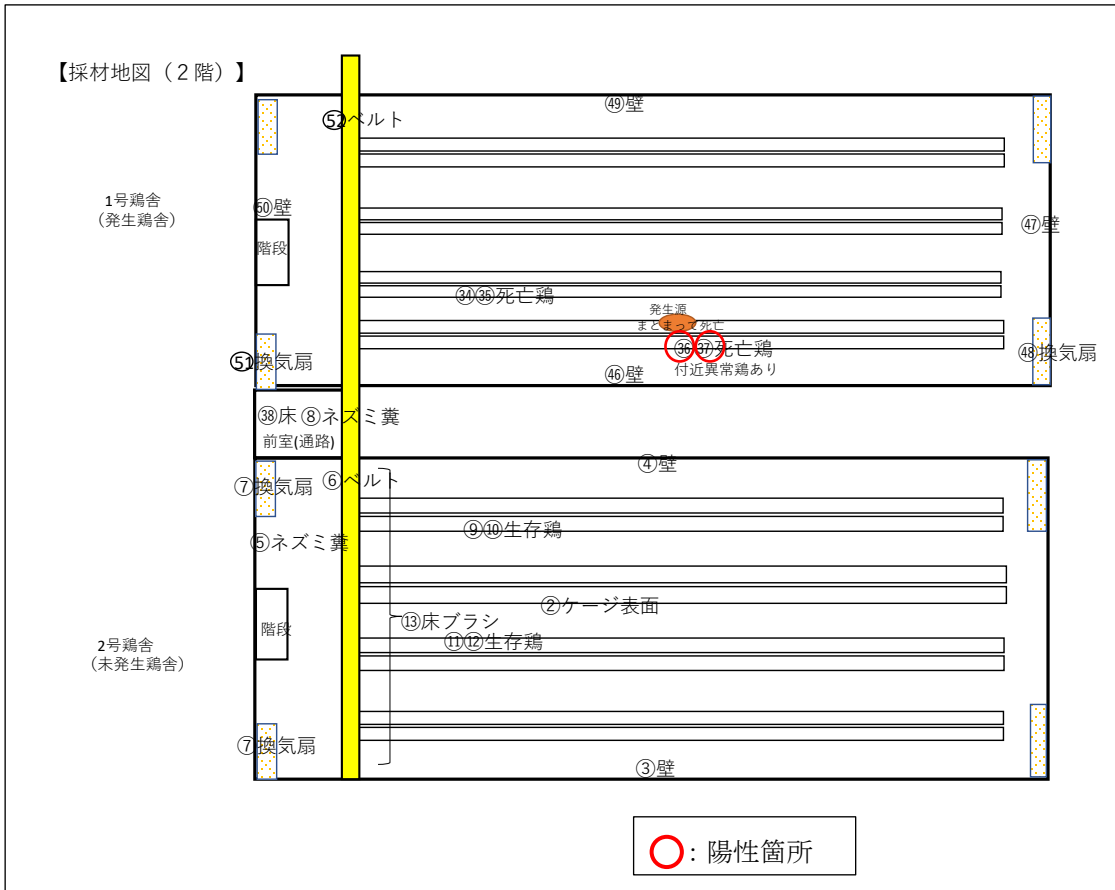
環境検査材料リスト (下線部はウイルスが検出された検体)

採材場所	採取したサンプル
発生鶏舎 (1号舎 1階)	鶏死体スワブ (気管、クローカ)、鶏生体 (気管、クローカ)、前室床、壁、ネズミ糞、
発生鶏舎 (1号舎 2階)	鶏死体スワブ (気管、クローカ)、壁、換気扇、集卵ベルト
未発生舎 (2号舎 1階)	壁、換気扇、前室床、長靴底
未発生舎 (2号舎 2階)	ケージ表面、壁、ネズミ糞、集卵ベルト、換気扇、鶏生体スワブ (気管、クローカ)、床ブラシ
鶏舎不明 (1~3号舎のいずれか)	鶏死体スワブ (気管、クローカ)

【鶏舎1階 採材場所見取り図】



【鶏舎2階 採材場所見取り図】



## 80. 岩手県1例目（金ヶ崎町）の事例

### (1) 概要

#### ① 所在地

岩手県金ヶ崎町

#### ② 飼養状況

採卵鶏 約8.4万羽

鶏舎	飼養羽数	日齢
31号舎-1 (空舎)	—	—
31号舎-2 (空舎)	—	—
32号舎-1	42,000羽	69日齢
32号舎-2 <発生鶏室>	42,000羽	109日齢

(令和5年3月14日現在)

#### ③ 発生確認日

令和5年3月14日

#### ④ 農場見取図



### (2) 現地疫学調査実施年月日

令和5年3月14日

### (3) 農場の周辺環境・農場概況

- ① 農場は内陸の平野部に位置し、周囲は水田や雑木林に囲まれている。
- ② 当該農場から約250mの河川において、カモ類5羽を確認した。
- ③ 当該農場は、ウインドウレス鶏舎が2棟(4鶏舎)あり、発生時はうち1棟(2鶏舎)が空舎であった。各鶏舎には背中合わせの直立5段ケージが2列あり、発生鶏舎では108日齢の



採卵用育雛鶏を飼養していた。なお、1ケージ当たりの飼養羽数は15羽程度であった。

- ④ 発生鶏舎の換気は、鶏舎の平面上部から天井裏に入気し、天井裏の入気スリットを通じて、鶏舎内に空気が流れ込み、排気は鶏舎上部から排気専用ダクトを通じて屋根のモニター一部から放出される構造になっていた。

#### (4) 通報までの経緯・発生時の状況

- ① 飼養管理者によると、平均死亡羽数は0～2羽程度であるところ、3月7日朝の健康観察時に、鶏舎後方部分の下段部分のケージで8羽の死亡を確認したが、コクシジウム症を疑って経過観察としたとのこと。
- ② 8日以降も10羽以上の死亡が5日間程度続いたが、鶏舎内で死亡が点在していたことや、死亡数が急増しなかったため、引き続きコクシジウム症であると考え高病原性鳥インフルエンザは疑わなかったとのこと。しかし、出荷時期が近づいたこともあり、高病原性鳥インフルエンザを否定しておこうと考え、13日に家畜保健衛生所に連絡したとのこと。
- ③ 通報まで、発生鶏舎以外の鶏舎では特段の異状は認められなかったとのこと。調査時、最初に異状が確認された場所の周辺で死亡鶏を確認したが、隣の鶏舎では異状は認められなかった。

#### (5) 管理人及び従業員

- ① 飼養管理者によると、当該農場には従業員が8名おり、普段の飼養管理は3名で行い、残り5名は鶏舎洗浄、導入・出荷等の作業を担当していたとのこと。なお、鶏舎の飼養管理を行う3名は、特に鶏舎ごとの担当を定めていなかったとのこと。
- ② 飼養管理者によると、会社の管理獣医師の定期的な立ち入りはなく、最後に来場したのは令和4年の鳥インフルエンザのシーズン前とのことであった。

#### (6) 農場の飼養衛生管理

- ① 農場の入口は1箇所あり、入口には立入禁止の看板が設置されるとともに、上下左右から噴射される車両消毒ゲートが設置されていた。
- ② 飼養管理者によると、従業員は、出勤時、農場から少し離れた会社事務所に自家用車を駐車し、事務所内で作業服の着用及び長靴への履き替えを行い、社用車で農場まで移動すること。農場に到着後は、農場入口のプレハブで、農場専用の作業着及び長靴を着用し、手指や靴底の消毒を行い、衛生管理区域に入るとのこと。
- ③ 従業員が各鶏舎に入る際には、鶏舎前室に設置された高圧洗浄機で靴底の泥を落とし、踏込消毒槽で消毒を行い、鶏舎専用の長靴に履き替えていたとのこと。その後、手指の洗浄及びアルコール消毒を行い、鶏舎専用の手袋を着用後、消石灰が入った踏込消毒槽で消毒を行ってから入舎していたとのこと。
- ④ 飼養管理者によると、飼料運搬業者等の鶏舎に立ち入らない外部事業者は、入口のプレハブ内で、農場備付けの農場内専用作業着と長靴の交換のみを行っていたとのこと。また、外部事業者（導入業者、出荷業者）が鶏舎に入る際は、従業員の場合と同様の手順で入舎していたとのこと。
- ⑤ 系列農場から雛を導入しており、鶏舎ごとにオールイン・オールアウトを行っているとのこと。オールアウト後は鶏舎の洗浄・消毒を実施し、次の導入まで約45日の空舎期間を設け

ているとのこと。

- ⑥ 死亡鶏は、毎朝の健康観察時に鶏舎奥にまとめて保管した後、蓋つきポリバケツに入れ、週に2回程度、社用車で系列農場に運搬し、焼却炉で焼却していたとのこと。なお、系列農場に運搬後、ポリバケツは系列農場で消毒することはなく、農場に持ち帰った時点で入口にある動力噴霧器で洗浄・消毒を行っていたとのこと。
- ⑦ 鶏糞は、除糞ベルトを2～3日に一回稼働させ、自社のダンプカーに積載し、近隣にある自社の堆肥場に運搬し、発酵処理をすることとのこと。
- ⑧ 鶏舎横の飼料タンク上部には蓋が設置されており、鶏舎内のラインを通じて自動給餌が行われていた。飼養鶏には消毒した井戸水を給与しているとのこと。
- ⑨ 飼養管理者によると、他農場とは、車両、重機、器材等の共用はなく、系列農場と従業員の共有も行われていないとのこと。

(7) 野鳥・野生動物対策

- ① 飼養管理者によると、農場敷地内でカラスやスズメを見ることがあるとのこと。また、周辺の水田には、最近までハクチョウが飛来していたとのこと。
- ② 飼養管理者によると、農場周辺でイノシシ、クマ、タヌキ、キツネ、カモシカ等が目撃されるとのこと。
- ③ ネズミ対策として、鶏舎の支柱等にネズミ返しを設置しているが、発生鶏舎を含め、農場内でネズミを目撃することはあまりないとのこと。また、ハエもほとんどいないとのこと。
- ④ 鶏舎外壁、防鳥用のネットや金網に大きな破損はなかったが、発生ケージ付近の木製外壁が破損しており、隙間を確認した。また、まとまった死亡等の異状が確認された場所の真上に位置する入気スリットの天井裏に、中型哺乳類のものと思われる糞が確認された。

(8) 環境サンプル

環境検査材料リスト（下線部はウイルスが検出された検体）

採材場所	採取したサンプル
発生鶏舎 (32号舎-2)	前室床、後室床、長靴底、作業用手袋、鶏舎壁、 <u>気管・クロアカスワブ</u> （死鶏）、屋根裏動物糞、鶏舎外床、鶏舎周辺野鳥糞、鶏舎外野鳥古巣
未発生鶏舎 (32号舎-1)	前室床、長靴底、気管・クロアカスワブ（死鶏）、鶏舎周辺野鳥糞

【発生鶏舎採材場所見取り図】

